

魔法少女リリカルなのはvivid 二人の武人

モフモフ狸

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

ミッドチルダでは魔界から逃げてきた妖怪による事件がとあるところ起きていたそのため時空管理局は霊界に助けを求めたこの話はかつてお互いに認め鍛練した最強の二人が異世界で妖怪事件を解決する物語である

## 目次

表の顔は道場の先生裏の顔は妖怪退治	1
霊気ってナニ？未知のチカラ	3
過去への思い／ある少女の願い	6
時を超えた出会い／再会した聖王と霸王	9
ヴィヴィオの手に入れた新たなチカラ	12
アインハルト／秘められたチカラ	15
リオとコロナ／悩めるふたり	18
リオとコロナの真剣勝負	21
とある妹が行方不明／意外な再会	24
飛影と蔵馬ふたたびミッドへ	27
懐かしき仲間たちとの再会	31
合宿先での新たな出会い	35
合宿トレーニング開始	38
合宿3日目／先輩からのアドバイス	41
合宿最終日／力と力の激突	44
新しい仲間はまさかのチャンピオン？	51
二人との別れ／そして思わぬ送りもの	59
ジークの決断	68
それぞれの選択	76
娘からの挑戦状	82
師との別れ／そして	90

## 表の顔は道場の先生裏の顔は妖怪退治

霊界の番人であるとある男は困り果てていた時空管理局から妖怪退治を出来る人間を送ってくれないか？と緊急の連絡をもらったのだが妖怪退治の出来る人間などそうそういないので二人の男女に白羽の矢を立てた

そしてその男女が今霊界の番人の前に立っていた

「何でそんな面倒くさいことをしにやきやいけないんだ」と女性が番人に向かって文句を言っていた

「そう言うなワシだって断られば断るが妖怪関連となるとそう簡単には断れんのだ」と女性に頭を下げる

「わかったよ」と女性はため息交じりに答えたその代わり条件を出した相方は私が決めるそして自分たちの力は一番強かった頃にするこの二つの条件を出した

そしてその相方の名前を出した瞬間番人は眉をひそめた私が指名するのは戸愚呂弟だとその条件を飲めば依頼を受けると番人は少し考えたが「良かろう」と一言言った

そしてその相方である男が呼ばれた最初は何で俺がと渋ったが「一度くらい人様の為に働いてもバチは当たらないだろ」と一言言われて渋渋了承した

そして戸愚呂とその相方になる美しい女性はミッドチルダに旅立った

その後ろ姿を見ながら番人の男は一言「頼んだぞ幻海」とその言葉を聞いた女性は軽く手を上げて返事をした

そしてミッドチルダに着いた二人はさっそく妖怪退治をすべく対象を探していだがなかなか見つけることが出来ないでいた

どうしたものか？と二人で考えているとある考えが浮かんだこのままシラミつぶしに探すよりも拠点を作ってそこを中心にしてみた方がいいのではないか？という考えになりどうせ二人ともに武術を極めているのだから道場みたいなものを作って子供たちに武術を教えながら生活していこうという考えになった

それから二年ほどたったある日いつものように子供たちに武術を教えていると「こんにちは」と明るい声が出て声が出た方を見ると一人の子どもがこちらに歩いてきたすると一人の女の子が私も武術を習いたいと頭を下げてきた

それを聞いた二人は「ミッドにはストライクアーツと呼ばれる格闘技があるだろうと言った」それを聞いた女の子はストライクアーツはやっているしかし武術を極めれば今以上に強くなれると考えたすぐに道場に入れると思ったが女性の方が質問してきた

「なぜ強くなりたいのか？」とその質問をされて女の子は少し考えたそして「わたしには目標にしている人がいるその人は昔自分を助けるために最後まで諦めずに戦ってくれたその人に少しでも近づきたい」と女の子は力強く語ったそれを聞いた二人はこう思った「この子は強くなる」とそう感じた二人は女の子の前に行き名前を聞いたそしてその子はこう答えた「高町ヴィヴィオ」と

## 靈氣つてナニ？未知のチカラ

「じゃあとりあえず試験をする」といい幻海はヴィヴィオにツボの中に入っている紙製のくじを引かせたどうしてこのようなことをするのか？とギモンを抱いたヴィヴィオは幻海にたずねたすると「いいからひきな」と少しイラついた様子で答えたするとそれにおどろいたヴィヴィオは少し泣きそうになった

ツボの中に手を入れて一枚の紙を取ったその紙はまるでヴィヴィオの持つ瞳と同じくらいきれいな赤色だった

その紙を見た幻海は「合格だよ」とヴィヴィオに一言そうつけた  
ナニが合格なんだろうとアタマの上には？マークを浮かべているともうひとりの道場主である大男がヴィヴィオのギモンを解決してくれたその紙は紙に触れたヒトに靈氣があるかないかを調べるものだとそしてその靈氣が強ければ強いほど紙は赤くなるとそういう仕組みだつまりヴィヴィオには相当強い靈氣が流れているということだろうと教えてくれた

だがヴィヴィオはギモンに思ったそんなに強いチカラが流れているのならなぜ今まで気づかなかったのだろうとそんなに強いチカラが流れていれば自分でも気づくはずだとそれなのに今まで気づかなかったのはどうしてだろうと

その答えを教えてくれたのは幻海であった「こっちの世界では靈氣よりも魔力の方が注目される魔力の方が利用価値があるという考えがおおよそを占めているだから自分の中に流れている靈氣に気付かないヤツが多いのだと」話したそれを聞いたヴィヴィオは確かにと思った自分だってほんの数分前まで自分に靈氣が流れているとは思ってもみなかったからだ

そしてその日からヴィヴィオはストライクアーツと靈氣による武術の二刀流で生活していこうと決めるのであった

ある日いつも通りヴィヴィオと道場の子どもたちが道場で靈氣の修行をしているとある二人の女性が入ってきたその二人の顔を見た幻海と戸愚呂は「懐かしい客が来たね」と声をかけたその二人を見た

ヴィヴィオはおどろきをかくせなかつたそこにいたのはオレンジ色の髪をリボンで結びきつちりした執務官の制服を着たティアことティアナランスターと青い髪にこちらも青と白の防災士令の制服を着たスバルナカジマが道場の入り口に立っていた

それを見たヴィヴィオはどうして二人がこんなところにとギモンに思つて二人に聞いたすると二人はヴィヴィオにこう告げた

「わたしたちもこの道場で靈氣の修行をしたのだがスバルはわたしは主に戸愚呂先生に格闘を教えてもらったと」それを聞いたヴィヴィオはいきさつを幻海に聞いたすると幻海は昔を思いだすように語りだしたあの日ティアナは指名手配の男を追いかけていた男を荒廃したビルの屋上まで追いこみもう少して逮捕できるところで思わぬジャマが入つたであろうことかその男は当時時空管理局の悩みの種であつた妖怪を用心棒に雇つていたので

妖怪に魔法攻撃は効かない指名手配の男はその後ろで余裕の表情を浮かべていたティアナが連れて来ていた魔導師はぞくぞくとその妖怪に倒されいよいよティアナ一人になつたティアナも応戦したがやはり妖怪に魔法攻撃は効かなかつたいよいよ死を覚悟したティアナの前に二人の男女が表れた一人は二十歳位のピンク髪の胴着を着た小柄な美しい女性もうひとり緑のコートに黒のパンツそして黒いサングラスをかけた大男だつた一瞬ティアナはこの二人が妖怪の仲間だと思ひ警戒したしかしそれは間違いだつた

その男女は自分がどんな攻撃をしても勝てなかつた妖怪をまるでハエでも殺すように一瞬で片付けたそれを見たティアナはある思いを持った「この二人に鍛えてもらえば自分はきつと強くなると」その思いを伝えると女性はこう言つた「鍛えてやるのはかまわないだが弱音を吐くのは決して許さないとそれでもいいなら私達の道場に来な」とそれを聞いたティアナは一言「はい」と返事をしたそれからティアナは修行を始めた偶然にもティアナは靈氣の才能がありすぐに靈氣による武術を覚えたそれを見た幻海と戸愚呂は思わぬ発見をしたと語つた

そのため今では魔力と靈氣どちらも扱える様になり雑魚妖怪なら

余裕で倒せる力をティアナは手に入れていた

スバルはというと偶然ティアナの修行を見に行つた時に見た戸愚呂の肉体を見たことがきっかけで道場に通うようになった当時のスバルはこう思つたらしい「この道場で鍛えればきつとあんな頑丈な肉体になれる」とそれを聞いた戸愚呂はどうしたものか?と考へたらしいそんな昔の事を思い出し幻海は少し笑つてしまった

そんな話を聞いたヴィヴィオは道場の奥で武術の練習をしている戸愚呂を見て少しだけかわいいと思つたのは余談である



## 過去への思い〜ある少女の願い〜

ある日二人は珍しくミッドチルダにあるデパートに買い物に来ていたその訳は道場の子どもたちには何で二人はいつも同じ格好なの？と聞かれたためだった最初は動きやすいからだと適当に理由をつけていだがあまりにも聞いてくるのでたまには違う格好をするのもいいのではないかと？と幻海に言われて戸愚呂も一緒に買い物に付き合ったしかしこの二人武術はピカイチでもファッションについてはまったくのダメダメだった

そのためある助っ人が二人のために立ち上がったその人物とはヴィヴィオの母にして管理局が誇るエースオブエース高町なのはと管理局の誇る敏腕執務官でありヴィヴィオのもうひとりの母フェイト・T・ハラオウンであったなぜこの二人が助っ人になったかというと愛娘であるヴィヴィオきつてのお願いだった

なのはとフェイトはヴィヴィオが道場に通い始めてからたまに道場に顔を出すようになったその時に二人と出会い色々話を聞くうちに意気合するようになったなのはは戦技教導官として見習うことが多く靈気は使えなくても勉強になることはたくさんあったフェイトもやはり執務官として凶悪犯と戦うことが多々あり道場をたまに見学すると犯人確保に使える技術がありいい勉強になったそのようないふことがありなのはとフェイトはまるで昔ながらの友達のように付き合っていたそして今に至るデパートの洋服売り場に到着したヴィヴィオ・なのは・フェイトは二人をどんな風にイメチェンしようと考えていた幻海も戸愚呂も見た目は二十歳前後なのでどんな服装でも似合うと思いきってミニスカートとノースリーブあとカーデイガンのセットを勧めてみた最初それを見た幻海は絶対にイヤだと断つただが戸愚呂が「ものは試しだ一度くらい着てみればいいだろう」と言い嫌々ながら服を受けとり試着室に入っていたそして試着室から出て来た幻海を見て戸愚呂は驚いたそこには見慣れた胴着の幻海ではなくまるで別人のようになった一人の女性が立っていた

それを見た戸愚呂は「馬子にも衣装とはよく言ったものだ」と言いそれを聞いた幻海は「フンおだてたつて何もでやしないよ」とそっけない返事を返した

次は戸愚呂の番になったのだが「俺がお洒落をして何の得がある」と言われたそれ聞いた幻海は「あたしも恥を忍んで受け入れたんだお前も少しは付き合え」と怒鳴られたそのあと戸愚呂に似合う服を探し本人に渡した渡された服は青の半袖シャツ下は黒のカーゴパンツそしてトレードマークの黒いサングラスは見た目に怖いと言われ仕方なしに外すことになった試着室から出てきた戸愚呂を見てみんなこっちの方がいいと全員一致でこの格好になった

そんな買い物も終わりみんなで家路についていると戸愚呂と幻海がある気配を感じたその気配を感じた二人は三人と一応念のために幻海と一緒に返したその気配のする方へと戸愚呂が歩いていくとサンバイザーを被った見た目17才位の女の子が目の前に立っていたしかしその女の子は変わった格好をしていたまるで昔の格闘家が着ているような服を着ていたそして戸愚呂に向かいこう告げた「噂に名高い戸愚呂先生ですね今から自分と闘って欲しいと」それを聞いた戸愚呂はナニを言っているんだと思つた自分たちが相手にするのは妖怪であり人間ではないしかし目の前の女の子はそんなもの関係ないといわんばかりの鬨気を漲らしていたその鬨気を放つ女の子を見た戸愚呂はこう思つた「この子は過去の自分に似ているこのままでは力に固執しすぎて己を見失うと」そして戸愚呂は決闘の申し込みを受け入れた

そして戸愚呂はこっちの世界に来て初めて己の力を解放したそれを見た女の子は驚愕の表情になった男の筋肉がまるで生き物のように動きそう出し肉体が倍以上に大きくなったそして一言「まあこれで20%位だと」そして「じゃあ始めようか」と女の子に向きあつたそして謎の女の子と戸愚呂の決闘が始まつた

女の子は目の前の状況に啞然とした今まで闘ってきた人間には多少手こずることはあつても必ず勝ってきたしかし目の前にいる男は勝てる気が微塵もないしかしここで諦めては今まで自分のやってき

たことが否定されるような気がして我慢ならなかった

そこで女の子は今自分の持てる全ての力を男にぶつけようと構えたそしてその技の名前を叫んだ「霸王断空拳」としかし女の子の全力の一撃も男には効かず呆然したそして男は人差し指で軽くデコピンをすると女の子はまるで糸の切れた人形のようにその場に崩れ落ちたそして女の子を抱き抱えると最近ヴィヴィオつながりで知りあった女性に連絡を取った「ノーヴェすまないが今からいう場所に来てくれないかと」それを聞いたノーヴェという女性は一言「わかった」と答え自宅のマンションをあとにした

指定の場所に着いたノーヴェはその風景を見てこう思った「なんだこりゃ」と思った目の前には13才ぐらいの少女を抱っこしている困り顔の戸愚呂の姿があった

「おい戸愚呂のダンナこりゃやどいうわけだ」と言われまた困り果ててしまった

時を超えた出会い、再会した聖王と霸王。

戸愚呂に呼びだされたノーヴェエが着いたのはとある公園だった。ここにいたのは気を失っている少女とその少女を介抱する大男だった。それを見たノーヴェエは「とりあえずウチのマンションに行こう。訳は歩きながら聞くよ」といい少女をおんぶするように頼んだ。マンションに着くともうひとり住人でありノーヴェエの姉でもあるスバルが出て来たすると「どうしたのウチに帰ってきたらノーヴェエいないしあれ後ろにいるの戸愚呂先生？」と聞いてきたそれを聞いた戸愚呂は「すまないスバル俺が用事があつてノーヴェエに迎えに来てもらったんだ」と頭を下げて謝罪した。

それを聞いたスバルは「いいですよ頭なんて下げなくてそれよりも戸愚呂先生がおんぶしてる子誰ですか？」と聞かれた二人は「スバルも知ってるだろ謎の通り魔事件の犯人だよ」と答えたそれを聞いたスバルは「嘘でしょ」と言いその少女を眺めていた。

まだ少女は気を失っていたためソファアに寝かせ戸愚呂から話しを聞いた話によると少女はある目的のためにこのような事件を起こしていたようだった。その理由を聞こうと少女に近付くとちやうど少女も目を覚ましただがまだすこし額が痛むのか額はまだ赤みを帯びていたするとスバルが少女に声を掛けた「もう大丈夫みたいだね私はスバルそしてそっちいる赤髪の子が妹のノーヴェエそして後ろにいる男の人が戸愚呂先生だよ」と軽く紹介した。

すると少女も「ハイデイ・E・S・イングヴァルト」ですと力なく答えた少女にスバルたちはなぜこのような事件を起こしていたのかを聞いてみると「わたしの使命は先祖の願いを叶えることそれは霸王流が最強であることを世に知らしめること」と少女は語った。すると少女は男の方を見てこう言った「しかしこの人には全然かなわなかったとこれではダメだと」落ち込むように語った。

すると戸愚呂が「なぜ最強にこだわる最強になつたところで何も変わらないことだつてある」と少女に言い聞かせたすると少女は「私は先祖の記憶を受け継いでいる楽しい記憶もあればつらい記憶もその

中で一番印象に残っているのは自分が愛した女性を守れなかったこともっと自分が強ければきつと守れたはずだと」とまるで自分を責めるように少女は話したそれを聞いた戸愚呂は「お前が良ければ今度ウチの道場に来てみないか俺よりもお前のことを分かってくれる人間がいるかもしれない」それを聞いたスバルとノーヴェは「そうだな(ね)」と返事をし後日道場を訪れるという

形になった事件の後片付けはスバルとノーヴェと少女(アインハルト)が管理局に向きもうししないと本人が約束したためおとがめなしとなったそして道場を訪れる日を迎えた

道場に着くと戸愚呂ともうひとり小柄な女性がアインハルトたちを迎えたそしてその女性幻海に自分の事を話した。すると幻海は「先祖の記憶を受け継いでいるかどうか知らないがあんたはあんただろ違うかい」と話したするとアインハルトは「分かっているつもりですでもやっぱり思いたすとつらいんです」と泣き出してしまったそれを見た幻海は「ちよつとやそつとじゃ片付きそうにないね」と話しある人物を呼んだ「ヴィヴィオちよつとこつちに来な」ヴィヴィオと呼ばれた少女は「何ですか?」と自分を呼んだ師匠のところへ来た その少女を見たアインハルトは我が目を疑った目の前には自分の記憶にある紅と翠の瞳を持つ女性と瓜二つの少女が立っていたのだアインハルトはおもわず「オリヴィエ」とその女性の名を呟いていたそれを聞いたヴィヴィオは「なぜその名前をと」大変驚いた様子で聞いていた

すると幻海が「アインハルトといったねこのヴィヴィオと一本手合わせしてみな」と提案してきたそれを聞いた二人は「わかりました」と返事をし手合わせすることとなった

その理由をアインハルトと来ていたスバルとノーヴェが聞くと「多分二人の先祖は同じ時を生きお互いを認めあつた仲だったんだそしてなんらかの理由で別れた多分相当辛かっただろうあのアインハルトという娘はまだその呪縛から逃れられないでいるだからもしヴィヴィオと闘ってみて何か少しでもヒントが見つければいいと思つたのさ」と語つたお互いに向きあつたヴィヴィオとアインハルトはお互

いに構えを取ったアインハルトは霸王流ヴィヴィオは最近編み出したストライクアーツと靈気を組み合わせた独自のいわばヴィヴィオ流ともいうべき構えを取ったそして試合が始まった試合中アインハルトはこんな事を思った「この子はオリヴィエではないこの子に私の拳をぶつけてはいけないと」そう思ったアインハルトはヴィヴィオの拳を軽く裁き腹部に蹴りを入れて吹き飛ばしたそれを見た幻海は試合を止めた

するとヴィヴィオに軽く頭を下げて道場をあとにしようとしたするとヴィヴィオが「すみません何か気にさわるようなことしたでしょうか?」と聞いてきたするとアインハルトは「いいえあなたは悪くないこつちの都合です」と軽く返事をした

するとヴィヴィオが「良かったらあと一度だけチャンスをもらえませんか?」とアインハルトに頼んできたするとアインハルトは幻海の方を見たすると幻海は「なら二週間後にここじゃないもつと広い場所で決着つけようか二人ともそれで文句ないね」といい二人とも「ハイ」と答えた

## ヴィヴィオの手に入れた新たなチカラ

アインハルトと手合わせをした翌日ヴィヴィオは「このままじゃダメだ」と考え何かヒントがないか?と思い道場のもうひとりの主である戸愚呂に相談する事にしたすると戸愚呂は「俺は幻海ほど靈気には詳しくないがヴィヴィオには靈気の他にもうひとつ力があるだろう?」と教えてくれたそれを聞いたヴィヴィオは「そうだ自分には魔力がある」とそれに気づくとヴィヴィオは自分の中で何かが見つかりそうな気がした。

そして試合までの約2週間で必ず新たなチカラを手に入れると誓った。そして試合の日になったその場所とはある空き地であっただがその空き地には立派な石で作られたリングがあった。そのリングは戸愚呂が二人のためにと使えそうな巨石を見つけリングに加工した特注品だったそれ見たアインハルトとヴィヴィオは戸愚呂に礼をいい戸愚呂は「気にするな」と軽く返した

その試合にはアインハルトとヴィヴィオの他に二人の師匠そしてヴィヴィオの友人たちであるリオやコロナの他にスバルの姉妹であるノーヴェエやディエチウエンデイなども見学に来ていたスバルとティアナも後で来るとノーヴェエに連絡がきていた。

リング上で向きあった二人はお互いに頭を下げヴィヴィオは「今日ありがとうございますごさいます全力で行かせてもらいます」とアインハルトに向かい構えをとったそれを見たアインハルトは「こちらこそお願いします」と軽く返事をし構えを取った

すると審判を務める幻海がルールを二人に告げた「この試合のルールは簡単相手を戦闘不能にした方が勝ちだ」それを聞いた二人は「わかりました」と大きく返事をした

するとヴィヴィオがあるモノを取り出した見た目はただのウサギのぬいぐるみだがそのぬいぐるみは空中に浮きそれを掴んだヴィヴィオはある言葉を発した「セークリッドハートセットアップ」とするとヴィヴィオの身体が光りそのあとには白と青を基調とした胴着風のバリアジャケットを着た見た目17才位のヴィヴィオが現れた

それを見たアインハルトも「武装形態」と発すると先祖から受け継いだ格闘家の着るバリアジャケットに変化した

そして二人の真剣勝負が始まった。

勝負が始まりやはり序盤から優勢なのはアインハルトであった。やはり実践でものをいうアインハルトの攻撃にヴィヴィオは防戦一方になってしまったがヴィヴィオも負けじと攻撃を返していたし、しばらく試合を見ていたギャラリーはこう思った「このままではまたヴィヴィオは負けると」そんな空気が流れるなかある二人は「まだ大丈夫だ」と心の中で思ったその二人とはヴィヴィオの師匠である幻海と戸愚呂であった周りとは違う二人の表情を見て遅れてきたスバルとティアナが戸愚呂に聞いた「お二人は何か知ってるんですか？」すると「ああまだヴィヴィオはまだ本気を出してないあいつは最初の手合わせのあと色々考えたんだそして一つの答えを出した」と「その答えとは？」と二人が聞くと戸愚呂は「見ていれば分かる」と試合に注目するように促した。

試合も終盤になりやはり優勢なのはアインハルトであったアインハルトはヴィヴィオを戦闘不能にするため霸王流の必殺技である「霸王断空拳」の構えを取った。それを見たヴィヴィオは「そろそろかな」と一言いうとセークリッドハート(愛称クリス)に「行くよー」というと今までとは違う闘気を纏ったヴィヴィオがそこにはいた。それこそこの二週間でヴィヴィオが考えた答えであった相談した戸愚呂に「お前にはもう一つの力があるだろ」と言われヴィヴィオは「霊気だけではダメだならこれに魔力を合わせて自分だけの新しいチカラを手に入れればいいと」その気を纏ったヴィヴィオはまるで古代ベルカで活躍した聖王オリヴィエと同じくらいの迫力を醸し出した

そのヴィヴィオを見たアインハルトは「これは私も本気でいかないといけませんね」と思い改めて霸王流の構えを取った。

そしてお互い全力の一撃を打ち込むべくお互いに突進したアインハルトは必殺の「霸王断空拳」をそれに対してヴィヴィオは左の腕を頭上に右の拳を脇腹に置き右の拳に自分の今持てる全ての力をこめ



突進した。アインハルトは「霸王断空拳」と叫び全力の一撃を繰り出した。その一撃を左手で受けたヴィヴィオ普通ならそこで終わるだがヴィヴィオはクリスに左の腕に防御の力を全て使うように頼んでいた。そのためかろうじてアインハルトの一撃を防ぐことができた。そしてヴィヴィオは全力の一撃を技名を叫びながらアインハルトに叩きこんだ。「霊光魔弾」とそれをまともに受けたアインハルトは後方に吹き飛んだ。霊光魔弾を受けたアインハルトは膝をつき動けないでいた。技を放ったヴィヴィオも全ての力を使い果たしてその場に膝をついた。それを見た幻海は「これじゃ試合の続きはムリそうだね。どうだい二人ともまだやるかい？」と尋ねた。すると二人は「もう大丈夫です」と告げた。

するとアインハルトがヴィヴィオに歩み寄りこう告げた。「ヴィヴィオさんこの前は失礼な態度をとってしまいすみませんでしたもし良ければ今からは一人の友人としてお付き合いしてもらえますか？」とそれを聞いたヴィヴィオは満面の笑みでこう答えた。「こちらこそよろしくお願いします」とそして二人は固い握手をかわした。それを見ていたギャラリーは二人に向かって割れんばかりの拍手を送り幻海と戸愚呂も「二人とも良くやった」と二人の健闘を称えるのであった。

## アインハルトく秘められたチカラく

アインハルトとあと二人この道場に通うようになった。その二人とはヴィヴィオの友人であるリオとコロナである。この二人は先日のヴィヴィオとアインハルトの試合を見て感じるものがあつたらしく試合の翌日に二人揃って入門を頼み込んできて。リオコロ曰く「私たちもこの道場で鍛えてもつと強くなりたい」と言ってきたそれを聞いた幻海と戸愚呂は「今さら二人くらい増えても変わりやしないよ」とため息混じりに答え二人の入門を許した。

アインハルトとリオとコロナは入門初日にヴィヴィオと同じ試験を受けることになった。ツボに入った紙を一枚ずつ取った。リオとコロナはヴィヴィオの時ほどではないが白い紙が赤くなった。

それを見た幻海は「へえあんたらも少しだが霊気を持っているみたいだねこれから鍛えれば多少は使いものになるかもしれないね」と告げた。それを聞いたリオとコロナは「私たちもヴィヴィオたちに負けないように頑張ろうね」と誓いあつた。

アインハルトはツボから一枚紙を取ってその色を見ると二人とは違うことに気がついた。二人が赤かったのに対してアインハルトの紙は自分の瞳と同じくらいの青だった。それを見た幻海は「アインハルトちよつと聞きたいことがあるんだがいいかい？」と質問した。それを聞いたアインハルトは「大丈夫です」と何かを覚悟したような顔つきで答えた。すると幻海は「この紙にはある特殊な加工がしてある霊気があると赤くなるそしてある気を持つものがその紙に触ると青くなるその気とは妖気だつまりあんたには妖気が流れている違うかい？」と聞いた。聞かれたアインハルトは短く「はい」と答えそれを聞いたヴィヴィオたちは驚いた。すると「やはりそうだったか」という声が聞こえてきた。声のする方を見るとそこには戸愚呂がいたそれを聞いたヴィヴィオが「どういうことですか？」という戸愚呂はこう答えた「こいつとはじめて闘ったときにわずかだが妖気を感じた最初は気のせいだろうと思っていたが」と告げた。

するとアインハルトが静かに語りだした。「私は先祖の記憶を受け

継いでいます。その記憶のなかにはある人物との出会いも含まれています。その人物との出会いはおよそ800年くらい前になります。その当時ベルカでは争いが絶えず色々なところで戦をしていました。その日クラウスとオリヴィエが戦場に向かう途中ある人物と遭遇しました。その人物を見たクラウスとオリヴィエは即座に臨戦態勢を取りました。その人物から発せられる気に背中に冷たいものが流れた。するとその人物は「別にこっちに戦う気はない」と言ってきた。するともう一人出て来た人物が「もしやる気なら相手になってやるぞ」と挑発してきた。それを聞いたクラウスは「いいだろう相手になってやる」と答え闘いが始まった。だが相手が悪かったその相手とは魔界最強の妖怪「軀」であった。オリヴィエはもう一人の妖怪に立ち向かうか迷っていた。「私では手も足も出ないと」思った。それが分かったのかその妖怪は「いい判断だな」と言いもう一人の妖怪に「そろそろいいだろ軀」と言い闘いを止めた。それを聞いた軀と呼ばれた妖怪は「うるせいぞ雷禪」と言い「ちっ」と舌打ちをしてクラウスから離れた。クラウスは軀によって半殺しにされていた。それを見たオリヴィエは「なんて強さ」と恐怖した。

すると雷禪と呼ばれた妖怪が「よくまあ軀に立ち向かったもんだなあ」とため息混じりに答えた。するとクラウスとオリヴィエは「お前たちの目的はなんだ」と聞いた。すると雷禪が「目的はとくにない」と答えた。「あえていうなら刺激が欲しくてな」と軽い感じで答えた。するとオリヴィエがなぜ刺激が欲しいのですか?と質問すると今度は軀が「俺達の住んでる世界では俺達に刃向かう連中が誰もいなくなつてつまらなくなつただから別の世界に来て相手を探していたんだ」と語った。

するとクラウスが急に突然大量の血を吐いた。軀との闘いで相当なダメージを受けたためだった。「このままではクラウスが危ない」と考えたオリヴィエは「クラウスを助けてください」と二人に頭を下げた。それを見た軀は「何を言っているそいつが死のうが俺には関係無い」と突っぱねた。すると雷禪が一言「しょうがねえな」と言い横になつているクラウスの隣に座り「今回は特別だあの軀に刃向かうバ

かなんて久しぶりに見た」と言い雷禅は自分の拳を強く握った。すると妖怪独特の色の血が流れてきた。すると雷禅が「助かりたかつたらこの血を飲めと」クラウスに言った。それを聞いたクラウスは「断るお前たちの血を飲むくらいならこのまま死を選ぶ」と物凄い形相で言い返した。

するとオリヴィエが「そんなこと言わないで下さい貴方とはまだまだ一緒に時間を過ごしたいんですだから私のためにもお願いします」と涙を流しながらクラウスに頼んだ。それを見たクラウスは「分かった」と返事をしその血を飲んだ。するとまるで今までのダメージが嘘のように元気を取り戻した。それを見ていた軀は「相変わらずお前は甘いな」と話し二人を見た。

そして二人に向かって「さっさと失せる俺はあのバカみたく甘くない」とこの場から消えるように言った。

そして二人はその場を後にした」という記憶を語った。それを聞いたヴィヴィオは「もしその時クラウスさんが血を飲むことを断わっていたら今のアインハルトさんはいないんですね」と言った。それを聞いたアインハルトは「そうですねあの方には感謝していますと」語り一言「ありがとうございます」と当時を思い出すように言った。

## リオとコロナく悩めるふたりく

リオとコロナが道場に入門して半年ほどがたった。しかしリオとコロナは最近こんな事を考えるようになった。「わたしたちって道場に通り始めて半年ぐらいたつけど少しは強くなったのかな?」とそんなことを思うようになったのは目の前の二人を見たからであった。その二人とは幻海と手合わせしているヴィヴィオその隣で戸愚呂と手合わせしているアインハルトを見たからである。ヴィヴィオは幻海から「ヴィヴィオだいたい霊気を自分のものにする事が出来たじゃないかやはりアインハルトと真剣試合をさせてのは正解だったよ」と珍しく誉めた。アインハルトの方も戸愚呂から「だいたい自分の中に流れる妖気をコントロールできるようになったなこのまま鍛えればいづれ完全に自分のものになる事が出来るようになるだろう」と語った。それぞれ師匠の誉め言葉を聞いた二人は「ありがとうございますこれからも精進します」とふたり揃って頭を下げた。それを見ていたリオとコロナはこんなことを思ってしまった「私達ってここにいてもいいのかな?」と思ってしまう。すると幻海がこんな事を聞いてきた「リオ・コロナあんたたちはどういうスタイルで闘うつもりかい?もうすぐ通いはじめて半年ぐらいたつけど何かヒント見つかったかい?」と聞かれたリオは「私には炎と電気の変換資質があるんですけどそれと霊気を合わせて何か出来ないかな?」と思っっていますと「それを聞いた幻海は「いいじゃないかそんなレアスキルなかなかないよ」と語り対してコロナは「私にはあまりこれといったスキルもないのでどうしたらいいのかな?」と思っっていますと語った。

それを聞いた幻海は「大丈夫だそんなに急ぐ必要はないよ」とアドバイスをしてくれた。

それを聞いたコロナは「ありがとうございます」と答えたがその声は少しだけ落ち込んでいるように見えた。その日から数日たつとコロナは道場に顔を見せなくなってしまった。それを心配したヴィヴィオとリオは学校帰りにコロナに原因を聞いてみようという話しになった。学校帰り三人は帰り道にコロナに「最近なぜ道場に来ない

の」と聞いてみたするとコロナは「ヴィヴィオやアインハルトさんそれにリオも徐々に自分のスタイルを見つけてるのにわたしは何もまだ見つけられてないそう思うとなんだか行きづらくなって」と謝った。それを聞いた二人は「大丈夫だよそんな気にしなくていいよ」と励ました。だがコロナは「やっぱりわたしにはムリだったんだよ」と答えた。それを聞いたヴィヴィオは「何で最初から諦めてるの努力もしないで弱音ばかりはいてそんなんじゃないよ」つまでも強くならないよ」と珍しく怒りを込めた言葉を投げ掛けた。その言葉にコロナは「ヴィヴィオにはわからないよチカラを持たないわたしの気持ちなんて」と反論した。それを聞いたヴィヴィオは「わからないよ努力もしないで弱音ばかりはいてる人の気持ちなんて」と反論した。するとコロナは「もういいほつといてよ」といい一人帰ってしまった。それを見たリオは「ヴィヴィオどうするの?」と心配した声で聞いた。するとヴィヴィオは「いいよどうせ今はなに言っただってムダだよ」といいその場から歩きだした。それを見たリオはヴィヴィオについて歩きだした。ヴィヴィオたちと別れたコロナは一人公園のブランコに座り「誰もわたしの気持ちなんてわからないよ」と愚痴をこぼしていた。すると公園の端の方から子ども泣き声が聞こえてきた。それを聞いたコロナはその声のする方向へと一目散に走っていった。そこには5才くらいの女の子に襲いかかろうとする妖怪の姿があった。コロナは「どうしよう誰かを呼んできた方がいい」と思いその場を離れようとした。するとその女の子がコロナに向かって「助けてお姉ちゃん」と助けを求めた。それを聞いたコロナは近くにあった木の棒を持ち女の子と妖怪の間に割込んだ。するとその妖怪は「おい嬢ちゃん死にたくなかったらそこをどけ」とコロナを脅してきた。だがコロナは「いや絶対にどかないこの子はわたしが守る」と反論した。それを聞いた妖怪は「ならオメエを殺して次にそのガキを殺すとするか」と言いコロナを攻撃し始めた。妖怪の攻撃を受けコロナは所々が傷つき中には大ケガになりそうな傷まであった。いたぶり飽きたのかその妖怪が「もういい二人まとめて殺してやるよ」と自分の腕を大鎌のようにして二人に襲いかかろうとした。するとコロナは女の子

を庇うように覆い被さったそこに妖怪は容赦なく大鎌を振り下ろした。コロナの背中は無情にも切り裂かれ地面に倒れた。

それを見た妖怪は「へっ正義の味方ぶるからこうなるんだ」と鼻で笑った。倒れたコロナを見た女の子は「お姉ちゃん大丈夫誰かお姉ちゃんを助けて」と叫んだ。女の子の声はかろうじて意識のあるコロナに届いたそしてコロナの中である声が聞こえた「お前はどうかいい」とそれに対してコロナは「女の子を助けていい」と言った。その声に「分かったならばお前の中に眠るチカラを解放しよう」という声が聞こえた。すると倒れたはずのコロナが起き上がった。受けた傷は全て癒え起き上がったコロナは女の子を見るとひと一言「すぐに終わるからあっち向いてて」と優しく告げた。するとコロナは「いでよ我が霊具ベルドラゴン」と告げると目の前に一本の薙刀が出てきた。その薙刀はコロナの霊気を纏い刃先はさらに鋭くなっていた。それを見た妖怪は「そんなオモチャが通じるとでも」と笑っていた。だがコロナがベルドラゴンを一振りすると妖怪の腕は二本とも一瞬で切り裂かれて消滅した。腕を切り裂かれた妖怪は「助けくれもう二度とその子には手は出さねえ」と言い土下座した。それを見たコロナは「わかりました」と言い女の子に「もう大丈夫だよ」とやさしく声をかけた。するとそこに妖怪の反応を見つけた。幻海と戸愚呂がやってきた。すると二人は「コロナけがはないか?」とやさしく声をかけた。するとコロナは「はい大丈夫です」と自分の霊具ベルドラゴンを持ち答えた。ベルドラゴンを見た幻海はコロナに「これがあんたの答えかい」と聞くと「はい」と元気に答えた。それから数日後道場に顔を出したコロナはリオとヴィヴィオそれと二人より心配していたアインハルトにそれぞれ謝罪した。それを見た三人は「気にしてないから大丈夫」と言い許した。そして道場で自分の相棒であるベルドラゴンを見せ「私はこの子と一緒に自分を鍛えていく」と力強く語った。

## リオとコロナの真剣勝負

ヴィヴィオたち四人はそれぞれの戦闘スタイルを見つめ始めていた。その戦闘スタイルにあわせて日々相手を変えながら手合わせをしていた。ある日ヴィヴィオとコロナが手合わせをしていた。ヴィヴィオは霊気とストライクアーツを組み合わせたヴィヴィオ流それに対してコロナは霊具ベルドラゴンを構え向き合った。

そして審判を勤めるアインハルトが「では始め」と声をかけた。するとヴィヴィオは拳と足に霊気を集中させコロナに突撃した。そんなヴィヴィオにコロナも負けじとベルドラゴンを振るい応戦した。対決は白熱しお互いに熱くなってしまったヴィヴィオは最近覚えた霊気と魔力を混ぜあわせて相手に向かって放つ「霊魔丸」を撃った。それをコロナはまともに受け吹き飛ばされてしまった。だがコロナとてここで終わるつもりなどなかったベルドラゴンにある言葉をかけると薙刀だったものが二股の槍に変化しその槍が二本現れた。それこそこの霊具ベルドラゴンの真骨頂であるコロナの気持ちに合わせて形態を変化させるのだ。「薙刀じゃヴィヴィオの速さからくる近接攻撃は防げないけど今の状態なら近くにこられても一方の槍で攻撃を防ぎつつもう一本の槍で攻撃できる」と考えたのだ。その考えは的中しヴィヴィオは今までほど攻撃出来なくなってしまった。するとヴィヴィオは「どうやってあの槍をさばこうかな?」と考えた。するとヴィヴィオはある考えが浮かび実行に移した。ふたたびコロナに突撃し頭上から左の拳を振りおろす攻撃を見せたそれを見たコロナは「今度は受けないよ」とその拳を一本目の槍で受け止めた。そして中段から放たれた右の正拳もヴィヴィオの右腕に二本目の槍をつき立て横にさばいた。そしてコロナは「よしこれで大丈夫」と思った。だがそれはヴィヴィオの作戦だった。上の攻撃を止められても下の攻撃があるとコロナの脇腹に向かって中段蹴りを入れた。上の攻撃を防ぐことに集中していたためまともに蹴りをくらいその場にうずくまった。それを見たアインハルトは「そこまで」と声をかけ試合を止めた。するとヴィヴィオが「コロナ大丈夫?」と聞くとコロナ



は「大丈夫だよ少しは近づけたかなと思っただけどまだまだだね」と笑顔で返した。それを見ていたリオは「コロナすごいヴィヴィオとあれだけ闘えるなんて」と思い「わたしもコロナとあんな試合してみたい」と思うのであった。

それから数日後道場でコロナがベルドラゴンを使つて鍛練に励んでいるとリオが「コロナもし良ければわたしと真剣勝負してくれないかな?」と頼んだ。するとコロナが「どうしたの?わたしは別に構わないよ」と返事をした。

すると幻海が「ならわたしが審判をしようかね」と声をかけてきた。すると二人は「お願いします」と頭を下げた。それから二人は向き合つて幻海の試合開始の号令を待った。すると「では始め」と声が掛かり試合が始まった。

コロナは相棒のベルドラゴンを構えた。それに対しリオは自分の変換資質を利用した炎の龍と電気の虎を出現させた。するとコロナは「すごいね」と驚きの声を上げた。するとリオは「ありがたうでも今からまだ驚いてもらうよ」というと炎の龍を剣の形に変形させその剣でコロナに切りかかった。その剣を受け止めたコロナは「すごいパワーだこれは何度も受け止められない」と思った。そこで一撃目をかろうじてさばくと一旦距離を取った。するとコロナはベルドラゴンを形態変化させ遠距離攻撃のできる槍に変えたりオはその槍をうまく剣でさばいていた。だがうかつ

に近づけなくなりリオは少しばかり不利になってしまった。するとリオは炎の剣を龍の姿に戻した。すると今度は電気の虎を長柄の戦斧に変化させた。それ見たコロナはベルドラゴンを槍からいつもの薙刀の形態に戻し戦斧の攻撃を受け止めた。だが電気で強化された戦斧の攻撃はコロナが受け止めるにはムリがあった後方に吹き飛ばされその場に膝をついた。するとリオは戦斧を元の虎の形態に戻した。するとリオは右の腕に炎を左の腕には電気を纏わせそのチカラを靈気で強化し混ぜ合わせて放つ「龍虎炎雷砲」というリオのオリジナル技をコロナに向かって放った。その一撃が決め手になった。砲撃を喰らったコロナは目を回してその場に倒れてしまった。それ

からしばらくするとコロナは目を覚まし「リオ強いねこれからまた機会があつたら試合しようね」と声をかけた。するとリオは「ありがとう」と笑顔で返した。それを見ていたアインハルトは「いつかりオさんやコロナさんとも真剣勝負を試みたいですね」と心の中で思った。

## とある妹が行方不明く意外な再会く

ある氷女が行方不明になった。名を雪菜というこの氷女はいつもは人間界に暮らしているのだが月に一度ほど魔界に足を運んでいた。その理由とはある妖怪とお茶を飲みながら話しをするためであった。その妖怪とは雪菜の兄である飛影の上司にあたる軀である。軀も月一ぐらいに自分の元を訪れる雪菜が気にいつていた。その理由は毎回雪菜が持つてくるお茶やお菓子がおいしかったからである。ある日雪菜が行方不明になったという連絡が軀の元に入った。どうやら自分の元にくる途中誤って次元の割れ目に落ちてしまったというのだ。それを聞いた軀はある人物を呼び出したその人物とは雪菜の兄で軀が絶大の信頼を置く部下飛影であった。軀は飛影に雪菜の搜索を命じた。それを聞いた飛影は「なぜ俺が行かなければならない」と断った。すると軀は「雪菜はお前の妹だろう」とすると飛影は「雪菜だつてもういい歳だ自分の事ぐらい自分で解決する」と言った。だが軀は「いいから行ってやれそうすれば雪菜も喜ぶ」と説得され渋々了解した。

雪菜の手掛かりを探すため飛影は霊界の番人であるコエンマの元を訪れた。するとコエンマは「雪菜が飛ばされた世界は昔お前が飛ばされた世界だ」と教えてくれた。それを聞いた飛影は「何？あの世界にか」と答えた。すると偶然にも用事のためコエンマの元を訪れていた蔵馬に会った。飛影を見た蔵馬は「どうしたんですこんなところに来るなんて珍しいですね」と声をかけた。

すると飛影が「雪菜がある世界に飛ばされたので俺が迎えに行く事になったんだ」とため息混じりに答えた。するとコエンマが「確か蔵馬もあの世界には行った事があつたな良ければ一緒に行つてくれんか？」と頼んできた。それを聞いた蔵馬は「別に構いませんよ」と返事をし飛影は「仕方ない」と言つて二人でまたあの世界に行くことになった。その雪菜はというと飛ばされた世界ミッドチルダの街で迷つていた。「ここはどこだろう？」とすると街のいた二人組の男が雪菜に声をかけてきたいわゆるナンパである。ナンパしてきた男た

ちに困っているとある方向から声がした。「すまないがその娘は俺の知り合いだ悪いが離れてくれ」とその声の主を見ると男たちは一目散に逃げていった。雪菜もその声の主を見て驚いた。そして「なぜあなたがここに？」と声を上げた。すると声の主である戸愚呂は「久しぶりだな氷女」と答え「お前が男たちに絡まれ困つていそうだったから声をかけたここではろくに話してもできん場所を移動しよう」と提案した。「どこに行くんですか？」と聞くと戸愚呂は「ちかくに俺がやっている道場があるそこに行けば安全だしかもお前の知り合いもいる」と教えてくれた。道場に着くとそこには見た目は若いが見間違うはずもない幻海がいた。幻海は「まさか雪菜か？」と声をあげた。すると雪菜は「はい」と返事をした。「どうしてこんなところに」と聞かれた雪菜は「魔界に行く用事があつたんですけど運悪く次元の割れ目に落ちてしまつて」と語った。

それを聞いた幻海と戸愚呂は「大変だったな」と声をかけ労った。すると雪菜が「どうしてお二人はこの世界に？」と聞かれ「なーにコエンマに頼まれてねこの世界で悪さする妖怪を退治する仕事をしているのさ」と語った。すると戸愚呂が「氷女お前はこれからどうする」と聞かれた。すると雪菜は戸愚呂に「わたしには雪菜という名前がありますですからこれからわたしの事は雪菜と呼んでください」と笑顔で返した。すると戸愚呂は「分かった」と返事をした。すると道場にいつもの四人組が現れた。「こんにちは」と元気にあいさつをして中に入ってきた。するとヴィヴィオたちは見慣れない女性がいることに気付き二人に声をかけてきた。「師範・先生その女の誰ですか？」とそれを聞いた戸愚呂は「俺たちのいた世界の人だちよつとした事故にあつてなこつちの世界に飛ばされてしまったんだ」と説明した。するとヴィヴィオたちは雪菜に自己紹介をした「高町ヴィヴィオです！ オウエズリーです！ コロナティミルです！ インハルトストラトスです！」とていねいにあいさつした。すると雪菜も「あいさつありがとうございます！ わたしは雪菜といます」と返した。すると雪菜の目線がある一点に集中した。それはヴィヴィオの首から下がっている一つのキレイな宝石であった。その宝石は雪菜が見間違うはずもない氷泪石

であった。すると雪菜はヴィヴィオに「すみませんがその宝石はどこで手に入れたんですか？」とそれを聞かれたヴィヴィオは「この宝石は数年前にある人にお守りとして頂いたんです」とそれを聞いた雪菜は「そうですか兄が渡したんですね」と言った。それを聞いたヴィヴィオは驚いた「飛影さんって雪菜さんのお兄さんだったんですか？」と言いその言葉を聞いた雪菜は静かにうなずいた。そんな雪菜を見ていた幻海は「雪菜やつと飛影が本当の兄だと分かったんだね」というと涙をためながら「はい」と嬉しそうに答えた。

それを聞いたヴィヴィオは「すみませんこの宝石氷泪石っていうんですねこれもしかして元々雪菜さんのものだったんですねお返しします」と話すと雪菜は首を横に振り「いえその氷泪石は返さなくて結構ですよ兄があなたにお守りとして渡したんですから」と話しそのまま持つておくように伝えた。雪菜がミッドチルダに飛ばされた数日後飛影と蔵馬が数年ぶりにミッドの世界に降り立った。

## 飛影と蔵馬ふたたびミッドへ

ある日飛影はいつも生活している魔界から人間界に行くためコエンマの元に来ていた。するとコエンマは「今は人間界に行く次元のルートが不安定でやめていたほうがいい」と進言した。だが飛影は「そんなの関係ない俺が行きたい時に行く」とコエンマの進言に耳を貸さなかった。そのせいで人間界に行くつもりが異世界であるミッドに飛ばされたのだ。飛ばされたミッドで飛影はある組織に保護されたその組織とは八神はやてが部隊長を務める機動6課であった。次元漂流者扱いとなった飛影であったが隊員の中ただひとり飛影のただならぬ力を見抜いた人物がいた。そう6課で新人4人に戦技指導をしていた高町なのはである。

なのはは飛影に「実力を見せて欲しいんだけど」というと「別に構わん」と返事をした。そして飛影は「お前とお前相手になれ」と指名した。その相手とはスターズの隊長のフェイトと副隊長のシグナムであった。そして飛影対フェイト・シグナムという試合が行われることとなった。試合を見学することになったのはやヴィータ新人たち四人はこう思った。「試合になるはずがない」とそう思っていた。しかしその予想は見事に覆された。飛影はこの二人相手に互角以上の闘いを見せたそれを見ていたのは達は「すごいあの二人相手にここまでやるなんて」と驚愕の声をあげた。すると飛影は「そろそろ終わりにするか」とつぶやき目にも止まらぬスピードで二人を峰打ちにして仕留めた。

それから飛影なのはとヴィータと新人四人の指導やたまに起きる事件にも出向き解決していった。その中で新人たちは飛影を信頼していきスバルとティアナは「飛影さん」とキャロとエリオは「お兄ちゃん・兄さん」と呼ぶようになった。そしてあの事件が起きたそうJ・S事件である。広域次元犯罪者であるジェイルスカリエツティが自らが作ったガジェットドローンや戦闘機人と呼ばれるいわば自分の娘ともいえる少女たちを使いミッドにある時空管理局の地上本部を襲撃した。それと同時に6課本部も襲撃を受け壊滅状態になって

しまった。それから数日後ある一人の人物が6課の本部を訪れていた。その人物とは飛影の戦友で今までいくつもの修羅場をとものに渡りあつてきた蔵馬であった。「なぜお前がここに？」と聞くと蔵馬は「コエンマに頼まれて行方不明になったあなたを探していたんですよ」とそれを聞いた飛影は「すまんが俺はまだ帰れんこんな事件を引き起こした張本人を殺してやる」と怒りをこめた言葉を語った。そんな飛影の様子を見たなのは達は震え上がり蔵馬は「こんな飛影を見たのは久しぶりだな」と思った。そして蔵馬が仲間に加わり新たな対決が始まった。蔵馬は新人たちと地上のドローンや戦闘機人を片付けるため戦っていた。だが戦いの中で蔵馬はあまりのドロンの多さにイラつき始めた「面倒だな」と一言呟くと容姿が変化した。そう伝説の妖弧蔵馬に変化したのだ。すると蔵馬は「離れている」というとおびただしい植物を生やしドローンを一掃した。その光景を見ていた数人の戦闘機人が蔵馬に突撃してきた。それを見たティアナとスバルが「蔵馬さん危ない」と叫んだが「問題ない」と呟くとまるで糸が切れた人形のように戦闘機人たちはその場に倒れた。「死んだの」とティアナが蔵馬に聞くと「ただ眠っているだけだ」と答えた。そして戦いはもう1つの場所に移った。スカリエツティは古代ベルカの最悪兵器である聖王のゆりかごを復活させたのだ。そのゆりかごの中でなのはヴィータそして飛影も一緒に戦っていた。ヴィータは駆動炉を止めるため動力元の巨大な結晶の前に立ったが敵の邪魔や結晶の固さに苦労していたするとヴィータと一緒に来ていた飛影が「俺に任せろ」と自分の愛刀を抜くと自分の妖力を纏わせ炎の剣を作り出したそして「邪王炎殺剣」と呟き巨大な結晶に切りかかった。すると結晶はいとも簡単に切り裂かれ粉々になった。それを見ていたヴィータはただ唾然とするしかなかった。そして飛影は「高町たちは俺に任せてお前は外に脱出しろ」と言った。ヴィータは「まだ大丈夫だ」と言ったが「いいから脱出しろ」と言われ渋々了解した。ゆりかごの真ん中にある玉座の間ではなのはの娘であるヴィヴィオとなのはが戦っていた。ヴィヴィオはゆりかごの鍵として拐われここに連れてこられていたのだ。玉座の間に着いた飛影になのはが「あと一人

このゆりかごを操作している人間がいるの」とそれを聞いた飛影は自らの邪眼でその人間を探した。するとその人間はゆりかごの最下層にいたことがわかったそれがわかると飛影はなのはに「少し待ってろすぐに戻る」と伝え一旦玉座の間をあとにした。最下層にいるクアットロはゆりかご内の異変を感じていた。だがこんな深いところまで来れる奴はいないとたかをくくり笑っていた。すると「何がそんなに可笑的い」と自分の後ろから声が聞こえた。クアットロが振り向くとそこには一本の刀を持つ一人の男がいたその男の目を見た途端クアットロは震えあがった。その目には殺意しかなくどうあがこうが自分の勝てる様子など微塵もなかった。

「殺される」と思ったクアットロはその場にしゃがみこんだ。すると「覚悟は出来ているんだろうな」と刀も持った飛影が歩いてきたそして自分の目の前に来ると飛影は刀の峰で首の後ろを殴り気絶させた。「貴様のようなクズの命などいらん」と言いゆりかご内に来ていた他の魔導師にクアットロを預け玉座の間に戻った。なのはとヴィヴィオの戦いはなのはが全力全開のスターライトブレイカーを放ちどうにかヴィヴィオを助けることが出来た。だがここで問題が起きた他の隊員たちはゆりかごから脱出できたのだがなのはとヴィヴィオ飛影の三人が取り残されてしまったのだ。なのはも自分の魔力を全て使い切りヴィヴィオも自分を支配していたレリックと呼ばれる結晶がなくなり子供の姿になっていた。それを見た飛影は「仕方ない」と呟くと自分の右腕に巻つけている包帯を外していったするとその右腕には黒い龍が巻き付いていた。その腕を見たなのはは「飛影くんどうするの?」と聞くと「外に出る穴をほがす」と言い「お前ら危ないから少し離れている」と二人に進言した。それを聞いたなのははヴィヴィオを抱えその場から離れた。飛影は右腕に力を込めると右の拳からものすごい黒い炎が立ち上がったそれを確認した飛影は「邪王炎殺黒龍波」と叫びゆりかごの天井に向かって放った。放たれた黒龍波は轟音をたてながら天井に穴を開けていった。青空が見え穴が開いたことを確認すると飛影はなのはとヴィヴィオを抱え外に飛び出した。そして事件は終了した。事件の張本人であるスカリエツ



テイはなのは達がゆりかご内で激戦を繰り広げている時にフェイトがアジトを見つけそこにいたスカリエツテイを逮捕していた。そして別れの時飛影はヴィヴィオにあるものを渡した。「これは氷泪石と違ってな俺の大事なものだこれをお守りだと思ってこれから強くなれ」と伝えた。するとヴィヴィオは「はい」と元氣よく返事を返した。そんな過去の思い出を二人で語りあっているとある方向から声がした「もしかして飛影くんと蔵馬さん」とその声のした方向を見るとあの時一緒にゆりかご内でもに戦った高町なのはの姿があった。その姿を確認すると飛影と蔵馬は「久しぶり（だな）高町（なのはちやん）」と挨拶をかわした

## 懐かしき仲間たちとの再会

なのはは管理局での仕事を終え自分の家に帰る途中だった。すると目の前にとても懐かしくもう会えないと思っていた顔を見つけ声をかけた。「もしかして飛影くんと蔵馬さん？」とその声を聞いた二人は「久しぶり(だな)」と返事を返した。なのはが「どうしてまたミッドに」と聞くと蔵馬が「飛影の妹の雪菜ちゃんがこのミッドに飛ばされたと聞いてね二人で迎えに来たんだ」と説明した。するとなのはは「飛影くん優しいね」と言葉をかける。その言葉を聞いた飛影は「ふん俺は元々来る気はなかったんだそれをあいつが無理やり行かせたんだ」と苦虫を噛み潰したような顔で語った。それを聞いていた蔵馬となのはは苦笑いを浮かべていた。するとなのはは「ここじやなんだから良ければ私の家に来ない？」と提案した。その提案に蔵馬が「せっかくだからお邪魔しますか？」と飛影に聞くと「こんなところに突っ立てるよりましか」と話し提案を受け入れた。そして二人はなのはの家に行くことになった。そこで二人はある二人の懐かしい顔に会うこととなった。家に着きなのはと話しをしていると「ただいま」という二人の声があった。その声の主は玄関からリビングに歩いてきた。そして飛影と蔵馬の姿を目にすると「なんで飛影さんと蔵馬さんが」と驚きもう一人の声の主は「久しぶり四年ぶり位かな？」と声をかけた。そうこの声の主は高町ヴィヴィオとフェイト・T・ハラオウンである。その二人に飛影と蔵馬は「久しぶり(だな)だね」と返事を返した。するとヴィヴィオが「なんで二人がまたミッドに来たの？」と聞くとなのはが「飛影くんの妹さんがミッドに飛ばされてしまったので二人が迎えに来たんだって」と説明するとヴィヴィオが「もしかして雪菜さん？」と聞くと「なんでお前が雪菜を知っている？」と飛影が質問してきた。その質問に「雪菜さん一週間位前に飛ばされて偶然通りかかった私が通う道場の先生に保護されたんだって」と返した。すると蔵馬が「ヴィヴィオちゃんの道場の先生？名前は？」と聞いてきたので「はい戸愚呂先生です」と明るく返した。すると飛影と蔵馬は驚きの声をあげた「まさかあの戸愚呂か」とその名前を聞いた飛影

はヴィヴィオに「道場はどこにある？」と珍しく焦ったような声で聞いた。聞かれたヴィヴィオは「いまから案内しましょうか？」と提案し蔵馬も一緒について行くことになった。そして道場に着くと飛影は「雪菜いるのか？」と叫んだすると奥から「もしかして兄さんですか？」と普通に雪菜が出てきた。その飛影の声に道場の主の一人が出てきて二人の姿を確認すると「まさか飛影と蔵馬か？」と声をあげたその人物を確認すると飛影と蔵馬は臨戦態勢に入った。だがもう一人の主の登場に二人は驚愕の色を隠せなかった。「久々会ったと思ったらなんだい道場破りにでもきたのかい？」と声をかけられた。そうそこには二人が見間違うはずもない幻海の姿があつたのだ。「とりあえず上がるな詳しい話しはそこでだ」と言い二人を道場の中にあげた。そしてコエンマに頼まれてこのミッドで悪事を働く妖怪を退治しながらこの戸愚呂と二人で道場をやっていることや雪菜は飛ばされた当日街で男たちに絡まれているところを偶然通りかかった戸愚呂が発見し保護したことなどを伝えた。それを聞いた飛影は「そんなこと信じられんな」と幻海の説明に納得しなかったすると雪菜が「兄さん幻海師範の言っていることは全て本当ですもしこの戸愚呂さんに保護してもらわなかったら私は今ごろどうなっていたかわかりません」と真剣な顔つきで飛影に訴えた。その訴えを聞いた飛影は「わかった」と短く返事をし戸愚呂に「妹が世話になった」と礼を言った。すると戸愚呂は「別に礼を言われる筋合いはない偶然通りかかっただけだ」と説明した。その様子を見ていた蔵馬は「幻海師範戸愚呂の奴だいぶ変わりましたね」と声をかけた。すると幻海は「ああこつちに来て子どもたちとふれあつていくたびに少しずつだが丸くなった」と少し嬉しそうに語った。すると道場になのはとフェイトが現れた「ふたりともどうしたの？」とヴィヴィオが聞くとなのはが「あのね飛影くんと蔵馬さんがミッドに来てるって元六課のみんなに話したらみんなものすごく会いたがつててねもし良ければ明日管理局に行つて久しぶりに会つてくれないかな？と思つただけだ」とそれを聞いた蔵馬は「俺は別に構わないよ飛影はどうする？」と聞かれ「俺は行かんんでまたあんな奴らに会わないといけないんだ」と拒否した。す

ると雪菜とヴィヴィオが飛影にお願いした「兄さん前に皆さんにお世話になったんでしょ」「飛影さん私からもお願いします」と説得され  
渋々了解した。それを見ていた幻海と戸愚呂は「いくら飛影でもあの  
二人に頼まれては断れんか」と心の中で思った。その日は道場に泊ま  
り翌日なのはやフェイトヴィヴィオとともに管理局を訪れた。する  
とそこにはスバルやティアナそして偶然仕事休みでミッドヘフェイ  
トに会いに来ていたエリオとキャロの姿もあった。二人の姿を確認  
するとみんな大喜びし自分たちの近況を報告したり二人に習った戦  
い方を実戦で試していることなどを話した。するとそこへ三人の少  
女が現れたその三人を見て飛影と蔵馬は顔色を変えた。そこにいた  
のは四年前のあの事件で敵として戦った戦闘機人だった。するとス  
バルが「そうだ説明するねこの三人は私の姉妹でねノーヴェ、デイエ  
チ、ウエンデーっていうの」と説明すると蔵馬が「へえここじやあ  
んな凶悪犯罪を犯した人間が普通に生活できるのか」と声にし少し怒気  
を加えながら言った。それを聞いたノーヴェたちは俯いたまま言葉  
を発しなくなってしまった。それに続くように飛影が「そうだな普通  
はあんな凶悪犯罪を犯した人間ならば一生務所暮らしか最悪死刑で  
もいいだろうに」と淡々に語った。それを聞いていたスバルは「二人  
はノーヴェたちがちゃんと更正した姿を見てないからそんな事が言  
えるんだよ」と強く反論した。それを聞いた蔵馬は「じやあ更正し  
たっていう証拠を見せなよ上っ面だけの言葉なんてなんの重みもな  
いよ」と冷たくあしらった。それを聞いていたノーヴェたちが口を開  
いた「スバルその人の言う通りだ私たちが犯した犯罪は重いそれこそ  
死ななきや償えないほどの」と語り飛影と蔵馬の前に三人が立った。  
「覚悟は出来ています私たちを殺して下さい」と頼んできた。それを  
聞いた蔵馬と飛影は「いいんだな?」と聞き三人は「はい」と答えた。  
すると飛影が自分の愛刀を抜いたそれを見たスバルたちは「飛影さん  
は本当に殺す気だ」と思い蔵馬に止めるように頼んだ。だが蔵馬も  
「殺してくれと言っているんだ」と冷たく返した。そして飛影は三人  
に向かって切りかかった三人は切られると思っていたが違う痛みを  
感じた。

それは頭に落ちてきた手刀による痛みだった。「どうして？」とノーヴェエが聞くと飛影が「もし助けて下さいなどと命乞いをするようなら容赦なく切り捨てていた」と話した。すると蔵馬が「だが君たちは逃げなかつたその強い気持ちを確認したかつたんだその気持ちがあれば大丈夫さ」と三人に声をかけ「怖い思いをさせて悪かつたね」と優しく声をかけた。声をかけられた三人は「ありがとうございます」と声を殺しながら泣いていた。それを見ていた四人とヴィヴィオは涙を浮かべスバルは「蔵馬さん酷いですよ」と文句を言った。するとスバルは「ごめんスバル」と言つて頭を撫でていた。するとそこにある人物がやってきた「飛影くんも蔵馬くんも久しぶりやな」と声がかけられた。声の主は元機動六課部隊長八神はやてであった。「久しぶり(だな)」と挨拶し話しをしていた。するとヴィヴィオが飛影と蔵馬にこんなお願いをしてきた「今度私たちみんなで合宿トレーニングに行くんですけど指導役としてお二人もついてきてくれませんか？」とそれを聞いた蔵馬は「どうしますか？飛影」と聞くと「どうせ断つても連れていくんだろ」と答え「別に構わん」とヴィヴィオに返事をした。それを聞いたヴィヴィオは「ありがとうございます」と元気よく頭を下げた。

## 合宿先での新たな出会い

蔵馬と飛影が道場を訪れる前日ヴィヴィオたちは幻海に「あんたたちもだいぶ靈気や妖気を自分のものにできるようになったね」と珍しく褒めてくれた。

すると「そこで今度合宿トレーニングをすることに決めた、その合宿で自らの腕をさらに磨いて欲しい」と語った。それを聞いたヴィヴィオたちは「どんなところですか？」と聞くと「最近発見された島でね、昔はある程度人が住んでいたんだが今はただの無人島だその島なら思う存分暴れられるからね」と話した。合宿のことを四人に伝えたと「悪いが今日はわたしが野暮用があるんだ、だから今日はここでおしまいだ」と言つて四人を帰した。

すると幻海は空中に向かつて話し始めた、「おい聞いているだろ早く返事しな」と話しかけるすると「聞こえておるなんの用じゃ」と少し迷惑そうな声で靈界の番人であるコエンマが返事をした。「ちよつとした用を頼みたいだある奴をこつちの世界に送つてくれ」と頼んだ。その名前を聞いたコエンマは「わかった頼んでおく」と返事をし、「じゃ頼んだよ」と言つて通信を切った。

そして合宿の日になった。合宿に行くメンバーはヴィヴィオたち四人、二元機動六課の四人、そしてヴィヴィオに頼まれて渋々やってきた飛影と蔵馬そして幻海と戸愚呂となった。合宿先に着き自分たちが寝起きする場所のあるところまで歩いて行つた。その場所に着くときれいなログハウスが何棟か立っておりこれを見たメンバーは「へえ以外とキレイだね」などと話した。するとある方向から声がした、「おい久しぶりだなお前ら」と声のした方を見るとそこにはある一人の男が立っていた、その男を見た飛影、蔵馬そして戸愚呂も驚いた。すると幻海が「来てくれたかい悪いな幽助」と声をかけた。それを聞いた幽助と呼ばれた男は「構わねえよどうせ人間界でヒマしてたんだから」と返事をした。その男を見た他のメンバーは「師範すみませんがその男の人は誰ですか？」と疑問をぶつけた、すると「ああこいつはわたしの弟子でなの合宿に来てもらつてお前らの相手などを

してもらおうかなと思つてね」と語つた。それを聞いた幽助は「まあそういう事だ短い間だがよろしくな」と話した。それを聞いたヴィヴィオたちは「よろしくお願いします」と頭を下げた。そのメンバーの中アインハルトが幽助を見ながら「何故この人からあの人と同じ雰囲気があるんだろうか?」と心の中で疑問に思った。その日は着いたばかりという事で本格な合宿は翌日からとなった。夕食の時間になると外からいい匂いがしてヴィヴィオたちは外に出た、するとそこでは幽助が料理を作っていた。その姿を見たメンバーは「幽助さん何作つてるんですか?」とそれを聞いた幽助は「俺な人間界でラーメン屋やつてるんだ、だからなそのラーメンをご馳走しようと思つてな」と話した。それを聞いたメンバーは「やったー」と声を上げて喜んだ。メンバーにラーメンを振る舞つてしていると戸愚呂が「あれからだいぶ腕をあげたようだな浦飯」と話すと「まあなあんと闘つたあとも色んな奴と闘つたからな」と話していると戸愚呂が「そうか」と返事をした。

すると今度は幽助が「まさかあんたが道場開いて子どもに武道を教えるなんて夢にも思わなかつたぜ」と話した。それを聞いた戸愚呂は「俺も最初は戸惑つた俺なんかには教えられることなどあるのか?、とだがあいつらと出会い一緒に生活していく中で自分が少しずつではあるが変わり始めたという実感が湧いてきた」と話した。ラーメンを食べ終わって自分たちが泊まるログハウスでゆっくりしているアインハルトが「すみませんわたし浦飯さんに用事があるのでちよつと行つてきます」と言つて幽助が泊まつているログハウスに向かつた。ログハウスに着くと幽助たちは昔話しに花を咲かせていた。アインハルトがドアをノックすると「はい」と返事が返つてきて蔵馬が出てきた。すると「すみませんが浦飯さんいらしゃいますか?」と聞いた。「うんいるよ呼ぼうか?」と蔵馬が幽助を呼ぼうとするとその声が聞こえたのか「アインハルトつたけなんの用だ」と言つて幽助が出てきた。幽助を確認したアインハルトは「すみませんふたりきりでお話したいんですが大丈夫ですか?」とその表情を見た幽助は「いいぜならちよつと散歩でもするか」と言つて歩きだした。歩いて

いる途中アインハルトが口を開いた「浦飯さんあなたに聞きたいことがあるんですけどいいですか？」と聞くと「ああ構わねえよ」と返事をした。すると「あなたは雷禅という妖怪をご存知ないですか？」とそれを聞いた幽助は「なんでお前が親父の名前を知ってる」と返した。するとアインハルトは「やはりあなたから雷禅さんと同じ妖気を感じたんです、それにわたしもあなたと同じ雷禅さんの血が流れているんです」と返事をした。それを聞いた幽助は「どういふことか教えてくれねえか」と尋ねアインハルトも「わかりました」と返事をし事情を話した。すると幽助は「へえあの親父がそんな事をねえ」と話し意外そうな顔をしていた。「でもまあお前がそんな昔の恩を忘れずにいてくれたのはありがたかったぜ」と話し握手を求めた。それに対してアインハルトも「忘れるわけがありませんあの時雷禅さんに助けていただけなければこの世にわたしは存在しなかったんですから」とその手を強く握り返し頭を下げた。



## 合宿トレーニング開始

ヴィヴィオたちが幽助と出会いをはたした翌日、いよいよ合宿トレーニングの本番を迎えた。その日の朝、幻海が「さて今日から合宿本番だ」と話し、その顔は真剣そのものだった。「さて今日の合宿は実戦方式のいわばサバイバル訓練だ、今日はあんたたち八人対あしたち五人の対決だどっちかが全滅するまで行おうわかったかい」とヴィヴィオたちに聞いてきた。それを聞いたヴィヴィオたちは「ウソでしょ師範たち五人の相手なんてムリですよ」と話した。すると幻海は「なんだ今まで道場でやってきたことは遊びかい、あんたたちはなんのために鍛えてきたんだい強くなるためだろ違うかい」と言われ、メンバーは初心を思い出ししていた。「そうだ強くなりたい」という気持ちで今まで頑張ってきたんだ」と己を震い立たせた。その様子を見ていた幽助たちは「へえ気合い入ってんな」と思い、「これは手抜きできねえな」と心の中で思った。

そして対決の火蓋が切つて落とされた、その瞬間スバルとヴィヴィオとアインハルトが幽助たちに突撃していった。それに対するように幽助と戸愚呂そして幻海が迎え打つような形になった。ヴィヴィオとの対決となった幽助は手合わせをしながらヴィヴィオの戦闘スタイルを吟味していた「へえヴィヴィオはスピードを生かしたスタイルなのか、靈気とのバランスもいい感じだ」と感じていた。するとヴィヴィオは一旦幽助から距離を取ったそして幽助に向かってヴィヴィオオリジナルの集束砲である「セイクリッドブレイザー」を放った。「直撃だ!!」と思いい心の中でガッツポーズをしていると幽助が「すげえな! なら俺も十八番を見せるぜ」と語り、指先に靈気を集中させた「これが俺の靈丸だ」と叫び放った。セイクリッドブレイザーと靈丸がともにもぶつかり合い、激しく押し合い弾けた。すると幽助は一瞬でヴィヴィオとの距離を詰め、鳩尾に拳を放った。だがヴィヴィオは間髪一髪ガードが間に合って直撃は避けられた。「直撃したらただじゃすまない」とヴィヴィオは背中に冷たいものを感じた。その他のメンバーも苦戦を強いられていた戸愚呂と対決しているスバルは責められずに

いた「相変わらず先生は化け物だ私も強くなつたと思つたけどそれ以上だ」と感じていた。スバルの様子を見た戸愚呂は「スバルお前の力はそんなものか？」と語りその言葉を聞いたスバルは「冗談すぐに本気にさせますよ」と笑って返した。「いきますよ」と声をかけまたスバルは突っ込んで行つた。だが途中である衝撃に襲われたまるで何かに撃たれたような最初は原因が分からずにいた。すると戸愚呂が自分に向かつて指を弾いているのが見えた。「きつとそうだ空気を弾いて弾丸みたいに飛ばしてるんだ」と気付いた。それに気付いたスバルであつたが攻守を逆転するまでには至らなかつた。幻海と対決しているアインハルトは最初は攻める事が出来ていたがだんだん攻撃のリズムを読まれ始め徐々に逆転され始めていた。「アインハルトあなたは確かに強いだがあまりに攻撃が単調過ぎるよそれじゃすぐに次の攻撃が読まれちゃう」とアドバイスをした。それを聞いたアインハルトは「じゃあどうすれば？」と聞くと「それは自分で考えなそれも合宿のトレーニングの一つさ」と教えてくれた。飛影と闘っているリオとエリオは自分たちの資質を利用した戦法で闘っていた。ふたりとも電気資質を持っていたため自分を身体強化させエリオはスピード重視のリオはパワー重視の戦法で攻めることにした。エリオが最大限のスピードで飛影に追い付きエリオのデバイス「ストライダ」でつばぜり合いを始めた。「ふん、久しぶりに腕を見てやろう」と飛影が言う。「ありがとうございます」とエリオは返事をした。リオはその光景を見て「ダメだ私が攻められる隙がない」と思った。すると飛影が「何を突っ立てるボーつとしてるヒマがあつたらさつきとかかってこい」と声をかけてくれた。それを聞いたリオは「はい」と返事をし飛影に立ち向かつて行つた。蔵馬と対決しているティアナとコロナは蔵馬の攻撃に参っていたティアナは「クロスミラーージュ」で遠距離攻撃をコロナは「ベルドラゴン」で近距離攻撃を仕掛けたのだがティアナの攻撃は蔵馬も守るように生える植物に阻まれコロナの攻撃は蔵馬の十八番植物の武器化で防がれていた。「このままじゃ打ちあかないわね」とティアナは「コロナ悪いけどしばらく蔵馬さんを足止めしといて」と頼んだ。コロナは「何か作戦でもあるんですか？」

と尋ねた。すると「まあね一か八かの大勝負よ」と笑って返した。それを見たコロナは「わかりました」と返事をし蔵馬に向かって行つた。一人残つたキヤロは「鋼鉄の縛鎖アルケミックチェーン」と叫ぶと幽助たち五人の足をピンクの鎖で縛り動きを止めた。するとキヤロがティアナに「ティアナさんもう限界です」と話しアルケミックチェーンは破られた。それを見たティアナは「ありがとうキヤロあとは任せて」と返事をしフェイクシルエツトを解除したそうティアナは逆転の一撃を五人にお見舞いするため力を最大限ためていたのだ。そして五人に向かって「スターライトブレイカー」と叫び全力全開の集束砲を放つた。「お願い決まってじやなきやもう打つ手が無い」と思つたティアナだったがその思いはものの見事に打ち砕かれた。飛影がその集束砲に向かって「邪王炎殺煉獄焦」と叫び技を放つたするとティアナの全力の一撃は打ち消されてしまった。それを見た飛影は「ふん少しは成長したかと思つたがまだまだだな」と言った。結局誰一人幽助たちに勝てるメンバーはいなかった。そしてこの日のトレーニングは幕を閉じた。

## 合宿3日目く先輩からのアドバイスく

合宿3日目は戦技教導を行うこととなった。幽助はヴィヴィオとアインハルト、幻海はティアナ、飛影はエリオとリオ、蔵馬はコロナ、戸愚呂はスバルとキャロとなった。幽助はヴィヴィオに「お前は靈氣が使えるだよな？」と聞くと「はい！使えますよ」と答えた。それを聞いた幽助は「よしなら今出せる最大の靈氣を出してみろ」と伝えた。ヴィヴィオは靈氣を最大限に高めそれを見た幽助は「よしこれなら魔力が底をついてもある程度闘えるし昨日ヴィヴィオが使った集束砲並みの靈丸も打てるな」と話した。それを聞いたヴィヴィオは「ありがとうございます今からもっと腕を磨いて強くなります」と元氣よく返事をした。「じゃあ次はアインハルトな、お前には妖氣が流れてるんだよな」と聞くとアインハルトは「はいまだまだ自分の力には出ないんですけど」と返事をした。「まあしようがねえよ流れてるのがあの親父の血じゃそう簡単にはいかねえよ俺だつて最初は振り回されて制御することなんてムリだったんだ」と話しアインハルトに焦らなくていいと言った。「まあもしその力を完全に自分のものできたらまずお前に近い年の奴に負けることはねえよ」と話しそれを聞いたアインハルトは「本当ですか？」と質問した。その質問に「100%約束するでも焦るな下手に焦るとその力に呑み込まれるそしてその先に待ってるのは絶望だ」と真剣な口調で語った。アインハルトは幽助の言葉を心の中にしっかりと刻みこんだ。

幻海に教えてもらっているティアナはデバイスを使わず靈氣と魔力を合わせた混合弾を打つ練習をしていた。「おいティアナお前はデバイスに頼り過ぎだちったー自分の力だけで昨日みたいな集束砲を打てるようになりな」とげきを飛ばされた。それを聞いたティアナは「何言ってるんですか！ムリに決まってるでしょ師範」と文句を言った。それ対し「いいかよく聞きなお前がもつと上を目指したいならデバイスなしであれ位の集束砲並みの混合弾を打てるようになれそうすれば並大抵の妖怪はお前の敵じゃあない」と語りそれを聞いたティアナは「やってやりますよ」と改めて気合いを入れなおした。飛

影に教えてもらっているエリオとリオは実戦方式で講義を受けていた。「エリオお前は変換資質で身体強化をするのはいいがそれでは攻撃の数が限られるだけ変換資質は攻撃だけに使え防御は自分の肉体を鍛え上げ相手の攻撃全てを見切る位の気持ちでやれそうすればお前はまだまだ強くなる」と語りそれを聞いたエリオは「本当ですか？それが出来たら飛影兄さんのようになれますか？」と質問した。「ふんそれはわからんが今より数段強さも速さも上がるだろうよ」と返事をした。リオに対しては「お前は変換資質が2つあるどちらが攻撃に使いやすい」と聞かれ「炎の方が扱いやすいです」と答えた。「なら電気の方は身体強化に集中して使えそうすればエリオやテスタロツサのようにスピードを生かしながら得意の炎の攻撃ができるようになる」と教えてくれた。蔵馬に教えてもらっているコロナは色んな攻撃に使える技を習っていた。「蔵馬さん遠距離攻撃だとわたし今槍位しかなくて他に何かありませんか？近距離なら大体大丈夫なんでけど」と聞くと蔵馬は「そうだね大小大ききの違う刃を召還してその刃で相手を攻撃するっていう手もあるかもしれないね」と教えてくれた。「それならわたしにもできそう」とコロナは思った。戸愚呂に習っているスバルとキヤロは変わった講義を受けていた。「スバル、キヤロ俺の課題は簡単だろ」と戸愚呂は話した。その内容とは「俺の動きを止めてみるどんな手を使っても構わん」というもの最初は簡単だと答えたスバルとキヤロだったがそう甘くなかった。戸愚呂は力を解放し50%ほどの力で二人の相手をしていた「スバルもつと足元に力を入れる！」と言われてスバルは自分の全体力を下半身に込め戸愚呂を止めた。すると戸愚呂は「今の感覚をちゃんと覚えておけ武道では下半身の力も重要だからな」と教えてくれた。その後キヤロの番になったのだが戸愚呂がキヤロにこのようなことを言った「キヤロお前にはアルケミックチェーンという捕縛魔法があるなそれを使って俺を止めてみる」とそう言われたキヤロは「じゃあ行きます」と言っただけでアルケミックチェーンで戸愚呂の動きを止めた。だが戸愚呂はキヤロの魔法をもろともせず破った。「おいキヤロこんなんじや仲間の支援なんてムリだぞせめて今の俺を5分は足止め出来る位

じやなきやな」と言った。それを聞いたスバルは「ムリですよ今の状態の先生を5分も足止めするなんて」と言われたキヤロは「戸愚呂さんもう一度お願いします」と頼み戸愚呂も「わかった」と返事をした。それから何度も繰り返し最終的には80%位まで力を解放した戸愚呂を10分位その場に足止めすることに出来るまでに成長した。それを見た戸愚呂は「よく頑張ったなまさか80%まで力を解放することになるとは思ってもみなかったこれから十分仲間の支援ができる」と話しそれを聞いたキヤロは「良かったわたしみんなみたいに攻撃できなからせめてこれくらいは」と語った。教導を受けてから数日間は個別練習となった各々指摘された箇所を克服していった。そして合宿最終日前日の夜にもう一度2日目に行ったサバイバル訓練が行われることが伝えられた。

## 合宿最終日く力と力の激突く

最終日の朝ヴィヴィオとアインハルトは二人で散歩をしていた。すると何かもの凄い音が聞こえてきた。音のする方へ歩いていくと4人の男が対一手合わせをしていた。そのメンバーは幽助、飛影、蔵馬そして戸愚呂であった。

そのメンバーの同士の手合わせを見ていたヴィヴィオとアインハルトはその凄さに息を飲んだ。

「凄いあんな手合わせ見たことない私達と闘った時は全然本気じゃなかったんだ」

と二人の視線に気づいた幽助が二人に声をかけてきた。

「ようヴィヴィオにアインハルトどうしたんだこんなところで」

と聞かれた二人は

「すみません散歩してたらもの凄い音がしててなんだろうと思ったら皆さんが手合わせしてて」

と返事をした。それを聞いた幽助は

「ああわりいな今日で合宿も最後だからよ俺らもお前らに全力で相手してやろうと思って調整してたんだ」

と笑って話した。その顔にヴィヴィオもアインハルトも自然と笑顔になった。散歩から戻った二人は起きてきた他のメンバーに自分たちが見た光景を伝えよう伝えた。

「私達も全力で向かっていこうそれがあの人たちへの恩返しになる」

とそれを聞いたメンバーは

「うんみんなで頑張つて勝とう」

と2日目に行ったサバイバル訓練のリベンジを誓うであった。

そしていよいよ合宿の集大成ともいえるサバイバル訓練の火蓋が切つて落とされた。

最初に突撃していったのはスバル、ヴィヴィオそしてアインハルトの3人その3人の相手をするのは幽助、幻海、戸愚呂の3人であった。ヴィヴィオが幽助に向かおうとするとアインハルトが

ヴィヴィオに声をかけてきた。

「ヴィヴィオさんすみません浦飯さんの相手は私に任せてもらえませんか？お願いします」

と頼まれてしまった。それを聞いたヴィヴィオとスバルは

「はい（うん）じゃあお願い（ね）します」

と返事をしてスバルは戸愚呂にヴィヴィオは幻海に向かって行った。アインハルトは幽助に向かっていきながら昨日の夢の中に表れた人物を思い出していた。

「よう小娘やつと会えたな俺が誰か分かるか？」

と一人の男が夢の中で話しかけてきた。

「あなたはもしかして雷禅さんですか？」

と返事を返した。するとその男は

「ああそうだ俺は雷禅だおい小娘俺が何故お前の夢の中に出てきたか分かるか？」

と聞いてきた。そう聞かれたアインハルトは

「まさか明日浦飯さん達と対戦するからですか？」と

それを聞いた雷禅は

「ああそうだあの息子と闘うとなると今のままじゃムリだからよろそろお前に俺の力を使えるようにしてやろうと思ってのだがムリはするなよ」

と話しアインハルトが

「はい気をつけますアドバイスありがとうございます」

と返事をする。と雷禅は

「まあせいぜい頑張りな」

と返事をし消えていった。それを思い出し幽助へ一直線に向かつて行った。自分に向かつてくるアインハルトを見た幽助は

「いいぜ相手になってやるとりあえずこれでも喰らいな」

と靈丸を放った。放たれた靈丸は一直線にアインハルトに向かつていった。だが雷禅の力が覚醒したアインハルトは靈丸を



受け止めある技の名前を叫びながら弾き返した。

「霸王流旋衝破」

と弾き返された霊丸は幽助へ戻ってきた。幽助は返された霊丸を素手で弾いて弾かれた霊丸は霧散した。それを見たアインハルトは接近戦に持ち込んだ。だが接近戦は幽助の十八番でもある二人はお互いに拳をぶつけあったしばらく殴りあいを繰り返したがお互いに体力も限界が近くなり次が最後の一撃となった。

アインハルトは

「霸王断空拳」

それを対し幽助は

「霊光弾」

を使った。その結果軍配は幽助にあがった。だが幽助も限界だったらしくその場に二人とも倒れた。

それを見たヴィヴィオは幻海にこう言った

「師範私も全力でいかせてもらいますと」

それを聞いた幻海は

「面白いあんたがどんだけ強くなったか見せてみな」

と返事した。するとヴィヴィオは自分の霊気と魔力を全開にしたすると霊気と魔力が混ざり合いとてつもないエネルギーが発生したそれを見た幻海は

「へえすごいじゃないか私も久々に燃えてきたよ」

と話し二人による闘いが始まった。

最初はヴィヴィオが攻めていたがやはり百戦錬磨の幻海後になると反撃されるようになった。ヴィヴィオは

「このままじゃ負ける一か八かこの技にかけよう」

と思い幻海に突撃していった。その様子を見た幻海は「何かする気だねいいだろう受けてたつ」

と思い構えた。ヴィヴィオは幻海の鳩尾に拳をぶつけるようにある技を使った。

「霊光魔弾」

ヴィヴィオが今使える最強の技である。だがヴィヴィオの技は幻海のある技によって防がれた。

「霊光鏡「反衝」

である相手が放った技をまるで鏡返しのように跳ね返す技だ。

その結果ヴィヴィオは自ら放った霊光魔弾で自爆してしまった。

それを見た幻海は

「まさか私にあの技を使わせるとわね正直驚いたよ」

とヴィヴィオに話しかけたがヴィヴィオは気絶してしまっただけ返事はなかった。

スバルと闘っている戸愚呂も闘いを楽しんでいた。

「スバルだ、俺が教えたことが身についてきたみたいだな」

とそれに対しスバルも

「はい先生に教えてもらった下反身の体重移動を覚えて一撃一撃

の威力がだいぶ増えましたよ今なら先生にだって一撃入れられま

すよ」

と話した。それを聞いた戸愚呂は

「面白いなら俺に一撃入れてみる」

と挑発してきた。それに対してスバルは

「じゃあ遠慮なく」

と殴りかかったがそこは戸愚呂スバルの一撃を易々と止めお返し

とばかりに拳で一撃入れたそれを喰らったスバルはぶっ飛んだ。

飛影と闘っているリオとエリオはだいぶ飛影のスピードになれ

互角まではほど遠いもところどころでいい攻撃が入れるように

なっていたそれを見た飛影は

「ふんこの前よりだいぶ動けるようになったなエリオそれにリオ

もな」

とそれを聞いたエリオとリオは喜んだ。

しかしリオにはまだ奥の手があった

「飛影さん私試したい技があるですよよかったですよよかったら見てくれませんか？」

とそれに対し飛影は

「面白い見てやる来いエリオお前の相手はその後だ」

と話しリオの新しい技を見ることとなったするとリオは

「雷爪虎脚」

と叫ぶとリオの足がまるで獣の足のように変化し左手には虎の  
のように鋭い鉤爪が生えていた。

「それがお前が出した答えかリオ」

と飛影が質問するとリオは

「はい変換質質を利用して脚力を上げスピードアップそれと同時に  
に攻撃用の鉤爪も着けました」

と答えた。その答えに飛影は

「良かろうその脚と爪が飾りもんじゃないと証明してみろ」

と言うとリオは大地を蹴り一瞬で飛影の眼前に表れた。

それを見たエリオは

「なんてスピードだぼくのソニックブーム並みの速さだ！」

と驚いていた。飛影もリオのスピードに目を見張るものがあつた  
らしく

「これから楽しみだぜ」

と密かに心に思うのであった。

蔵馬と対決しているコロナは蔵馬からもらったアドバイスをもと  
に編み出した技を試そうとしていた

「ベルドラゴンミリオンソード」

と叫ぶと大小の剣が無数にコロナの周りに表れたそして

「剣よ貫け」

と叫ぶと無数の剣が蔵馬に襲いかかった。だがその剣は蔵馬の  
得意技のひとつ

「風華円舞陣」

によつて全て防がれてしまった。それを見た蔵馬は  
「もう終わりかいもう少し遊びたかったな」

と言うとコロナが

「実は昨日出来たばかりの新技があるんですけどよかったですら受け  
もらえませんか？」

とそれを聞いた蔵馬は

「いいよ喜んで」

と答えてくれた。するとコロナは

「ベルドラゴンファイナルフォーム」

と叫ぶとコロナの前に龍が現れコロナはその龍の角を引き抜くように二本の剣を取り出した。その剣は煌々しく輝いており凄まじいエネルギーも発していた。するとコロナが蔵馬に

「これが最後の技です多分これを止められたらあたしに反撃する力はありません」

と語った。そしてコロナは叫びながら

「ドラゴンブレスクロスブレード」

と言って剣をクロスに切り裂いたするととてつもないエネルギーを伴った斬撃が蔵馬に向かって飛んできたそれを見た蔵馬は

「これは凄まじいななら俺も本気になるか」

と言って容姿を変化させた。コロナが放った一撃は凄まじいの一言であつたが目の前に生い茂る巨大植物の前では無力だった。そう蔵馬は伝説の妖弧蔵馬に変化していたのだ。

「まさかこの姿に変化することになるとはな」

と目の前に倒れているコロナを見て蔵馬はそう思った。

これまでの試合で後元気なのはティアナとキャロとエリオだけになつてしまった。するとエリオがティアナに

「どうします後ほくら3人だけになっちゃいましたけど何か作戦でもありますか？」

と聞くとティアナが

「エリオ少しだけでいいの飛影さんを足止めしてくれない」

と言つてきた。するとエリオは

「わかりましたやるだけやってみます」

と言つて飛影に向かって行つた。するとキャロに

「キャロアルケミックチェーンで飛影さんと浦飯さん以外の3人だつたら今の全力で何分もつ？」

と聞くとキャロは

「多分10分位は大丈夫だと思えますよ」

と話した。それに対しティアナは

「OKじゃあお願いね」

と話すとキヤロは3人に向かってアルケミックチェーンを放ち足止めを凶った。チェーンをかけられた3人はすぐに外そうとしたものの前の闘いの時とは比べものにならないくらい頑丈になっていた。飛影の足止めに向かったエリオは飛影と凄まじいつばぜり合いを繰り広げていた。それを見たティアナは

「よしこれならいける」

と話すと自分の魔力と霊気をフルチャージし始めた。

キヤロのチェーンの効力が切れる頃にはパワーがフルチャージされていた。するとティアナは片方のクロスミラージュで3人を狙いスターライトブレイカーを放った。だがその威力は両方で打つ位の威力があった。かろうじて戸愚呂が止め空に向かって弾いた。

すると今度はもう片方のクロスミラージュで飛影に向かって

スターライトブレイカーを放った。その威力に飛影は

「まさかこの数日間でここまで成長するとはな」

と言うと右腕から凄まじい黒炎を上げながらあの最強技を放った

「邪王炎殺黒龍波」

スターライトブレイカーと黒龍波がぶつかり合い凄まじい

エネルギーの押合いとなったがやはり威力は黒龍波に軍配

が上がった。だがまさか幻海達もここまで教え子達が腕を上げ

ているとは思わず心の中では驚きを隠せずにいた。

そして合宿の幕は閉じられ皆は島を後にした。

新しい仲間はまださかのチャンピオン？

雪菜は幻海から道場の留守番を頼まれた。頼まれた雪菜は

「おまかせください　では皆さんお気をつけて」

と話し幻海達は合宿へと旅立っていった。一人道場に残った雪菜は道場の掃除やお風呂の準備などをしていた。

そのような作業が終わり雪菜は夕食の準備のため買い物に出かけることにした。ミッドでの生活にもだいぶ慣れて普通に一人で買い物できるようになっていた。

買い物が終わり道場への帰り道川沿いの道を歩いていることとなる。道場への帰り道川沿いの道を歩いていると

一人の少女が服を着たまま川の中に入っていったのだ。

その光景を見た雪菜は慌ててその少女のあとを追うように川沿いの斜面を降りて川の中に入っていった。

その少女に追い付くと後ろから抱きしめるようにすると少女にこう告げた。

「はやまってはいけません　私で良ければ相談にのりますから」

としかしその少女は雪菜の言葉に対してナニ言ってるんだという顔をしながらこう答えた。

「はやまるもなにもうちはまだ洗濯のために川の中に入ってるんやけど」

思ってもみない答えが帰ってきて雪菜は呆気にとられてしまい

「せ　せ　洗濯ですか？ここ川ですよ」

という雪菜に少女はごく当たり前のように

「わかってるよいつも私の洗濯はいつもこうや」

と話す少女の周りを見渡すと川岸に一張りのテントがあった。  
それを見て

「もしかしてあのテントに一人で住んでるんですか？」

と聞かれた少女は

「いつもやないけど大抵この川沿いにテント張ってるよ」

と答えた。その答えを聞いた雪菜は少女にこう告げた。

「もしあなたがよかつたら今から私がお世話になっている  
道場に行きませんか？ あなたの服も洗濯しますし夕食も  
ご馳走しますよ」

と提案した。その提案を聞いた少女は

「ええよ名前も知らん人の家でお世話になるなんて」

と答えた。その答えに雪菜は

「そんな気にしなくて大丈夫ですよ 道場は私の知人の家  
でもあるしきつとその知人も私と同じ事をするはずですよ」

と笑顔で答えた。その笑顔を見た少女は

「ならお世話になろうかな お姉さん名前何ていうん？」

と聞かれた雪菜は

「私は雪菜と言います　あなたの名前は？」

そう聞かれた少女は

「うちの名前はジーク・リンデ・エレミアや」

と答えた。するとジークが「くしゅん（◇ω◇）／。．．．」  
とくしやみをした。それを見た雪菜はジークに

「早く道場に行きましようさもないと風邪をひきますよ」

と話し二人は一路道場へ一緒に向かった。道場に着くと  
お風呂が沸いていたので早速ジークをお風呂に入れた。  
ジークがお風呂に入っている間雪菜は彼女が着ていたジャージ  
などを洗濯していた。ジークがお風呂から上がると  
雪菜手作りの夕食がところ狭しと並んでいた。

「さあ食べましよう　遠慮なくさあどうぞ召し上がれ」

そう言われ最初は遠慮していたジークも雪菜手作りの夕食  
に舌鼓をうちあつという間にすべて平らげてしまった。

夕食を食べ終わるとジークは乾いたジャージを着て帰り  
支度を始めた。それを見た雪菜はジークに

「ジークさんどこに行くんですか？　まさかあのテントに  
戻るつもりですか？」



とそう聞かれたジークは

「うん　ここまで良くしてもらったやさすがにこれ以上は」

と話すジークに雪菜は

「あんな危険なところに女の子一人なんて危ないですよ  
今日はもう暗いので泊まっていてください」

と話すジークは

「それはさすがにあかんよ　今でも雪菜さんに迷惑かけてる  
の」

と話した。それに対し雪菜は

「いいんですよ　迷惑なんかじゃありませんだから泊まって  
いてください」

と言われたジークは

「じゃあお言葉に甘えて泊まらせてもらおうわ」

と話しその日は道場に泊まるになった。そして翌朝  
ジークが起きると雪菜は朝食の準備をしていた。

ジークと雪菜は一緒に朝食を食べ食べ終わると雪菜に礼を  
言つて道場をあとにした。そのとき雪菜はジークに

「あなたがよかつたらいつでも遊びに来てください  
大抵わたしは道場にいますから」

と話した。その日から幻海達が帰ってくるまで何度かジークは道場に遊びに来ていた。するとジークは雪菜のことを

「雪姉」

雪菜はジークのことを

「ジーク」

と呼び合うように仲良くなっていた。ある日ジークが雪菜にある相談をしてきた。

「雪姉　あのなうちインターミドルっていう大会のチャンピオンをしてるんやけど最近な昔感じてた格闘技を楽しむっていう気持ちか沸かんのやどうしたらええのかな？」

とそれを聞いた雪菜は

「わたしにはジークの気持ちはゴメンだけどわからない　でももしかしたらこの道場に通うと何か変わるかもしれないよ　環境を変えてみるのもひとつの手だよ　この道場に通ってる子ども達は純粋に武道を楽しんでる　きつとジークにもいい刺激を与えてくれるよ」

と話した。それを聞いたジークは

「ありがとう　雪姉やっぱり相談してみても良かったわ」

と思った。すると雪菜がここの道場主はあと3日位したら帰ってくるかと教えてくれた。そして3日後幻海達が帰ってきた翌日ジークは改めて道場を訪れた。

道場に着くと胴着を着た二人の男女が入口に立っていた。すると胴着を着た女性の方がジークにこう告げた。

「なんだい？あんたこの道場に何か用かい？」

そう聞かれたジークはこう答えた

「雪姉いえ雪菜さんにこの道場について教えてもらいました良かつたらわたしもこの道場に通わせてください」

とそれに対し女性（幻海）がこう答えた。

「ああ あんたが雪菜の言っていた娘かい？ 話しによれば

あんたインターミドルのチャンピオンらしいじゃないか

そんな娘がうちみたいなのボロ道場に何の用だい  
冷やかしならお断りだよさっさと帰りな」

と言われたジークはその言葉に強く反論した。

「うちは格闘技に関してはもの凄く真面目です 雪菜さんに相談してみてもこの道場なら自分の探している答えが見つかると思うんですだからよろしくお願いいたします」

と深々と頭を下げた。するとジークの声に気づいた雪菜が道場の奥から顔を出し

ジークの隣に並ぶと

「師範わたしからもお願いいたします この娘はきつと強くなります そしてこの娘の探す答えも見つかると思うんですから」

と言つて一緒に頭を深々と下げた。それを見た幻海と戸愚呂は

「あー わかつたよ だから二人とも頭を上げな ジークと

言ったね この道場に通うなら今から私が言うことを必ず守りな

ひとつ 弱音を吐かない ふたつ 仲間を大事にする

これが守れないなら速攻で叩き出すからね」

と言われた。それを聞いたジークは覚悟を決めたように

「はい 必ず守ります」

と返事をした。すると雪菜がジークにこんな事を聞いてきた。

「ジーク 今はどこで生活しているの？まさかまた川岸に

テント張つてそこで寝泊まりしてるんじゃないでしょうね」

とジト目で言われた。それに対してジークは

「しゃあないよ 友達のところにはたまにお世話になるけど

そんなちよくちよくお世話になるわけにもいかないし雪姉にも

今だっただいぶお世話になってるのに」

とその会話を聞いていた戸愚呂と幻海がある提案をした。

「あんたさえ良ければこの道場に住むかい？今さら一人位  
増えたところでどうつてことないよ」

とその提案にジークは

「あきませんよ これ以上皆さんに迷惑かけられへんし」

「とそれを聞いた雪菜は

「ジーク せっかくだからお言葉に甘えたらお二人もこう  
おっしやっているんだから」

とそれを聞いたジークは

「じゃあ すみませんがお世話になります」

と話しジークは道場に住むこととなった。

その日の学校が終わりヴィヴィオ達は道場に向かっていた。  
道場に着くと雪菜ともう一人の少女が玄関を掃除していた。  
その少女の顔を見たヴィヴィオ達は驚愕の顔になった。

「え え まさかチャンピオンですか？」

とその質問にジークは答えた。

「ああ 私は確かにチャンピオンや でも今はこの道場の  
一門下生やこれからよろしく頼むな」

と話しこの道場に新たな仲間が加わった。

二人との別れくそして思わぬ送りものく

合宿から戻って数週間がたったある日飛影と蔵馬は

「そろそろ俺達は人間界に戻る（よ）」

とヴィヴィオ達に伝えた。それはすなわち雪菜も一緒に戻るということを意味していた。それを聞いたヴィヴィオ達は少し悲しい顔をしながらも笑顔で

「今までありがとうございました」

と頭を下げた。それを見た雪菜も涙を堪えながら

「私こそお世話になりました 皆さんも元気だね」

と話すヴィヴィオ達は雪菜に抱きついた。  
すると飛影が雪菜に

「おい 雪菜そろそろ行くぞ」

と話し道場をあとにした。道場をあとにすると飛影が

「ちよつと用事を思いました 少し寄り道をするが  
いいか？」

と話す雪菜と蔵馬は

「構いませんよ けど一体どこに行くんです？」

と聞かれた飛影は

「ああ　大した用事じゃあない　　ある相談を受けてな」

と話し飛影はその相談を受けた日のことを思いだしていた。  
それは合宿から戻ってきた翌日のこと

「飛影さん　相談があるんですいいですか？」

とヴィヴィオとスバルに相談を受けていた。それに対して  
飛影は

「なんだ　　つまらん相談ならのらんぞ」

と答えた。それを聞いたヴィヴィオとスバルはこう伝えた。

「ある少女を飛影さんの力で助けてほしいんです　その少女は  
ある理由で眠り続けてるんです　だから飛影さんの力を借りて  
その少女を助けてあげたいんです」

とそれを聞いた飛影は

「おい　お前ら少し勘違いしてないか？　俺がここに来た  
のは妹の雪菜を迎えにくるために来たんだ　お前らの願  
いを叶えるために来たわけじゃない」

と答えた。それを聞いたヴィヴィオとスバルは

「すみません　飛影さんを困らせることを言っただけさっき  
言ったことは忘れてください」

と話しこの話しはそこで終わった。しかし飛影はその願

を忘れてはいなかった。その願いを叶えるため3人はある場所に向かった。目的の場所に向かう途中ある人物と落ちあつた。その人物を見た雪菜は

「どうしてあなたが」

と声を上げ蔵馬は飛影の意図が分かったのか

「はい はい そういうことですか」

と納得したような顔をしていた。そして四人は目的の場所に着いた。すると飛影が雪菜にこう伝えた。

「俺達はちよつと用事を済ませてくる だからお前はここにいろ 分かったな」

とそう言われた雪菜は短く返事をした。

目的の場所というのはある少女の眠る建物その名を聖王教会という大きな教会である。そしてなぜ3人がこの教会を訪れたかというところある少女を起こすためであつた。

素早く教会内に忍びこむと3人はその少女の寝ている部屋を探した。気配を探り部屋は見つけたがひとつ問題が起きた。その部屋の入口に見張りの娘が立っていたのだすると蔵馬がこう切りだした

「ここは俺に任せてくれ」

と話すと蔵馬は一輪の花を取り出しその花粉を風に乘せて見張りの娘たちのいるところへ飛ばした。すると見張りの娘はまるで魔法にでもかかったように眠ってしまった。

それを確認した3人は早速少女の寝ている部屋に入っていた



するとそこには一人の幼い少女が眠っていた少女の見た目は  
ヴィヴィオ達より幼く見えた。少女の姿を確認すると飛影が

「さて 始めるか外の奴らが起きると面倒だ」

と話し他の二人もそれに同意した。それから3人は作業を開始  
した。それと同じ時刻聖王協会にはある客人が来ていた

「いやー ーここにくるのも久しぶりやわ今日はお招き」

ありがたいなカリム」

と話すのはカリムと呼ばれた女性の友人で古代ベルカ魔法の  
使い手八神はやてとその融合騎であるリインフォースツヴァイ  
である。はやてはたまにカリムの招きで教会に来てはお茶を  
飲みながら談笑するのがひとつの楽しみになっていた。

二人でお茶を飲んでいるとカリムのボディガードを努める  
修道騎士シヤツハが3つの気配を感じカリムに報告した。

「騎士カリム あの方の眠っている部屋から教会以外の者の  
気配がします」

とその報告を受けたカリムはすぐにシヤツハとはやてととも  
に部屋に向かった。すると部屋の入口に見張りだったはずの  
修道騎士見習いのセインとその妹のデイドが眠っていた。  
それを見た3人は慌てて部屋に入ろうとするが中から強力な  
結界が張られていて中に入れなかった。だが唯一3人の中で  
はやてだけが中にいる全員の顔と名前がわかっていた。

「うちや 八神はやてや中におけるの飛影くんと蔵馬くんと

幻海さんやろ何やってるかわからんけどちよっと開けて」

と話すときまでびくともしなかった扉が開いた。

するとそこには眠っている少女の横で何かを始めようとしている飛影の姿があった。

その姿を見たシャツハは攻撃体制に入ったただがある人物がそれを止めた。その人物とは八神はやてである。

「シャツハ悪いけど今は飛影くんの邪魔せんと言って多分今からすることはきつとこの娘を助けることになる」

と説得された。するとシャツハははやてにこう質問した。

「この人達は誰ですか？あなたの知り合いですか？」

とその質問にははやては

「わたしの大事な仲間や だから信じてほしい」

とその言葉を聞いたシャツハとカリムは

「分かりました ここはあなたの言うことを信じましょう」

と話し飛影の作業を見守ることにした。すると飛影は

「ちつ とんだ邪魔が入ったがまあよかろうでは始めるぞ」

と話し飛影は邪眼を開いた。飛影の邪眼を見たシャツハとカリムは驚いた。そして邪眼を開いた状態で少女に触れると少女の全身を疹るように手をかざした。すると飛影が

「こいつの眠りを覚ます方法が分かった やはりこいつは最低限の生命を維持するために眠っている つまりこいつがこれから先も十分に生きていける力を与えれば大丈夫だ」

と話した。するとはやてが飛影に質問をした。

「やけど飛影くん そんな強力な力持つてる人なんて

ここにおるん？ そりゃ飛影くんや蔵馬くんは強い妖怪けど」

その質問に飛影はこう答えた。

「お前の目は節穴か だから幻海をここに連れてきたんだろう  
が幻海の霊光波動の力を使えばおそらくこの娘は目を覚ます」

とそれを聞いた幻海は

「全く面倒見のいいことだ こっちはいい迷惑だよ全く

それじゃ早速始めるよ ちよつと下がってな」

と話すと幻海は自分の霊力を最大限まで引きあげた。そして  
眠っている少女に向かって小さく呟きながら霊力を流しこんだ  
すると眠っていた少女の身体が光だしたそれを見た幻海は

「どうやら成功したみたいだね あと半日位したら多分

目を覚ますはずだよ」

と話した。それから様子を見るため半日ほど教会で時間を  
潰していると幻海が

「もうそろそろ目を覚ます頃だね」

と話し全員で部屋に向かった。すると部屋にはまるで今さっき  
目を覚ましたかのような一人の少女

「冥王　イクスヴェリア」

が起き上がり目を擦っていた。するとイクスは状況が理解できないのか目をぱちくりさせて周りを見渡していた。

その様子を見た全員が安堵の空気になりはやてが代表してイクスに説明した。

「はじめまして　わたしは八神はやてやあなたはここに居る人達のおかげで長い眠りから目を覚ますことができたんや」

と説明を受けた。その説明に納得したのかイクスは飛影と幻海の方を向くと深々と頭を下げた。

すると今度は蔵馬がシャツハとカリムに向かってあるものを手渡した。それはぱつと見　薬袋のように見えた。

「この薬は幻海師範と俺で調合した特別な薬です　毎日一回必ず飲ませてください　毎日必ず飲んでれば半年位で普通に生活できるようになりますから」

と伝えられた。それを聞いたシャツハとカリムは涙をこぼすのを堪えながら返事をした。そして飛影たちはヴィヴィオ達との約束を守り人間界に帰っていった

飛影たちが人間界に帰って半年位がたった頃道場ではいつもようにヴィヴィオ達が鍛練に励んでいた。

すると珍しくスバルが道場を訪れた。どうやら幻海達に用があつたらしいのだがヴィヴィオが師範達は今いないと伝えると

「そっか　じゃあ待たせてもらおうかな」

と話していると

「ただいま　今戻ったよ」

と声が聞こえ幻海が入ってきた。幻海はスバルの姿を確認すると

「スバル来てたのかい　ちょうどよかった」

と話した。何がちょうどよかったのだろうと考えていると

「入っただけで」

を言って一人の少女を招き入れた。その少女は

白いワンピースを着て髪は炎のような朱色

ヴィヴィオもスバルもその少女を見て驚愕の表情になった。

そこにはもう二度と目を覚まさないと思っていた

イクスヴェリアが立っていたのだするとイクスは

「久しぶりですね　スバル　ヴィヴィオ」

と声をかけてきた。それを見た二人はこれが夢ではないのか

とお互いの頬をつねったのだがやはり夢ではない

「イクス？　本当にイクスなの？」

と質問するとイクスは

「はい　わたしは本当のイクスヴェリアですよ」

と答えた　その答えに二人はイクスを抱きしめながら喜んだ。

するとヴィヴィオはイクスにこう質問した

「一体誰がイクスを目覚めさせてくれたの？」

とその質問にイクスは

「それは内緒です 絶対に口外するな」

という約束ですからと断りそれを聞いたヴィヴィオとスバルは

「まさか 飛影さんじゃあないよね」

とお互いに心の中で思うのであった

## ジークの決断

いつものように道場でヴィヴィオ達の面倒を見ていた幻海にジークがこう切り出してきた。

「師範 少しお話があります お時間よろしいですか？」

といつもと違う雰囲気幻海もこう考えた。

「これは何かあるね さて一体どんな事が聞けるやら」

と心の中で思いながら返事をした。

ヴィヴィオ達にそのまま鍛練の続きを指示すると二人で道場の奥に入っていった。

その様子を見ていたヴィヴィオ達は小声で話し始めた。

「ジークさんどうしたんだろう？ 師匠と二人きりで

話しなんてまさかこの道場を出て行くつもりかな？」

と少し暗い考えが浮かんで悲しい気持ちになった。

すると戸愚呂が

「お前たち 人の心配をしている暇があつたら自分の鍛練に時間を使え」

と怒られてしまった。ヴィヴィオ達はそんな暗い考えを吹き飛ばすようにいつも以上に鍛練に励んだ。

その時道場の奥ではジークと幻海が向かい合つて真剣に話し合いをしていた。そしてジークがその内容を話すと幻海は少し驚いた顔をしたがすぐにこう答えた。

「へえ それがあんたの出した答えかい？ ジークよく考えて出したんだろうね？ 後悔する答えなんて自分を惨めにするだけだよ」

と幻海に問われたジークは覚悟を決めた顔付きでこう答えた

「師範 うちは今までインターミドルで勝つことである意味生き甲斐みたいなものを感じていました けどこの道場で師範や道場のみんななそして何より雪姉に会えたことがうちを今まで以上に成長させてくれた だからうちはこれからこの道場一本でやりたいんです」

と話しその顔を見た幻海は

「これは本気だね やつとこいつも自分の答えを見つけてくることができたってことかい」

と心の中で嬉しく思った。話しが終わり二人が出てきた。するとヴィヴィオ達はジークの元に駆け寄り自分達が疑問に思っていたことをヴィヴィオが代表して質問した。

「もしかしてジークさんこの道場を出て行くつもりですか？ せっかく道場仲間になれたのに寂しいです」

と四人は涙を堪えながらジークの返事を待った。するとジークはきよんとした顔をしてこう答えた。

「出て行くって何？ 何を勘違いしてるかわからんけど うちはこのからもずっと道場におるよ」

それを聞いたヴィヴィオ達はあまりにも酷い勘違いに



恥ずかしくなりその顔は茹でだこのようになってしまった  
それを見たジークは「クスツ」と笑い四人に向き直った。  
すると今度はうって変わって真剣な顔付きになって

話しの内容を告げた　その内容とはこうである

「うちが師範と話してた内容はな　今度あるインターミドル  
には参加しない　そして今持つてるチャンピオンの座も  
返上してこの道場で武道一筋に生きてゆく」

っていう話をきつき師範としていたことを明らかにした  
それを聞いたヴィヴィオ達は愕然した。するとジークが

「みんなの驚く気持ちもよくわかる　けどうちはこの道場に  
来てみんなと毎日鍛練して気づいたんや　今のうちには  
インターミドルよりもこの道場で己を限界まで鍛え上げる  
方が大切なんや　それにうちも先祖から受け継いだ「チカラ」  
「スキル鉄腕」

っていう「チカラ」があるんや　でもなたまにその「鉄腕」が  
暴走してしまうことがあるんや　そやから師範や先生の元で  
このスキルを完全にコントロールできるようになりたいんや」

と話した。その真剣な顔付きにヴィヴィオ達はジークの覚悟  
が本物であることがわかった。するとジークは

「早速明日インターミドルの協会にチャンピオン返上を  
伝えてくるわ」

と話しヴィヴィオ達も納得せざるを得なかった。その日の夜  
ジークはあることを考えていた

「あの三人にはこのこと伝えんわけにはいかんよね」

と思い明日三人にちゃんと伝えようと決意するのだった。翌日協会に行く前に三人に連絡して道場の場所を伝え来てもらうようにした。

ジークに呼び出されたのは今までインターミドルで何度もしのぎを削りあったある意味戦友のような人物だった。その人物とは雷帝ことヴィクトリア・ダール・グリユン砲撃番長 ハリー・トライベツカ

そして天瞳流抜刀居合師範代 ミカヤ・シエベルである呼ばれた三人はなぜ自分達が呼びだされたか分からずにいる。するとジークが出てきて中に招き入れた。

招き入れられた三人を代表してミカヤが代表して質問した。

「ジークどうしたんだい？ 私たちをこんなところに呼び出して」

とその質問にジークはこう答えた。

「ゴメン みんな忙しい中来てもらって 今日大事な

話しがあつてわざわざ来てもらったんや」

その真剣な顔付きに三人は何かとても大事なことを話すつもりだなと考えた。するとジークは

「みんなには伝えんといかんと思つて来てもらったんや

実はうち今度のインターミドルには参加せん

そして今持つてるチャンピオンの座も返上する」

とそれを聞いた三人は驚きの声をあげた。

「どうしてだ 私たちは君をインターミドルで倒すという

目標を立ててやってきたのにこれではまるで君の勝ち逃げじゃないか」

と少し語気を強めてミカヤがしゃべった。それに対して

「悪いって言うことは十二分に承知してる　でもうちは

見つけたんや　やっとな自分が本当にやりたいことが　だからみんなには私の気持ちを伝えるために来てもらったんや」

と話した。ジークの話しを聞いていたハリーがこう切り出した

「じゃあよ　お前がそこまでこだわるこの道場の師範と先生

とやらを連れて来いよ　わたしがそいつらを見定めてやるお前との付き合いは私たちが長いんだ　もし私たちが見て信頼できる人間だと思ったらお前の意見を受け入れやるよ」

と約束した。ジークは幻海と戸愚呂を呼びに道場の奥へと入っていった。少しするとジークと一緒に幻海と戸愚呂が現れた。その二人の持つ雰囲気は三人は一瞬にして凍りついた

「なんだ　この二人の雰囲気はまるで化け物だ　自分達は

ある程度強いという自負があったがミッドにこんな化け物じみた人間がいるなんて」

というのが三人の一致した意見だった。すると幻海が

「あんたらがジークの話してた三人かい？　あたしや幻海

あつちのが戸愚呂だ　それであんたらジークの決意に意見があるようじゃないか？　よかつたら聞かせてくれないかい？」

するとヴィクトーリアことヴィクターが意見を述べた。

「それでは言わせていただきますわ 私たちは今までこのジークを倒すために努力してきたんですわ それが急にこのような道場に呼び出されてチャンピオンの座を返上すると言われたこっちの身も考えて欲しいですわね」

と怒りを込めて幻海にぶつけた。すると幻海が三人に

「あんた達の気持ちはわかった だがジークの気持ちもわかってあげてはくれないか？ この娘もこの娘なりに悩んで出した結果なんだ」

とそれ聞いた三人はこう考えてしまった。

「この二人がジークを変えたんだ ならこの二人を倒せばジークはまたインターミドルに戻ってくる」

とそう考えた三人は幻海にある提案をした。

「もし私たちが勝ったらジークをインターミドルに出るよう  
に説得してください 私たちが負けたらこれから一切ジーク  
にインターミドルに出るようには言いません」

とそれを聞いた幻海と戸愚呂は

「わかった けどちゃんと約束は守ってもらおうよ」

と話し急遽ミカヤ達三人と幻海、戸愚呂の試合が始まった。  
すると幻海が三人に向かってある提案をしてきた

「あんたら三人でかかってきな　こっちはあたし一人で十分だ」

とそれを聞いた三人は

「あたしたちもずいぶんとなめられたものだわ(な)

二人ならまだしも一人なら私たちの敵ではないわ(な)」

と考えた。だがこの考えはいとも簡単に崩れさつた

試合が始まると三人はデバイスを構え速攻で幻海に仕掛けたが攻撃は一切当たらずそれどころか幻海のスピードについていけずあつという間全員KOされてしまった。それを見ていたジークはこう思った

「やはり　師範は強い　わたしの選んだ道は正しかった」

と幻海を見ながら改めてそう思うのであった。起き上がった三人に向かって幻海はこう告げた

「さて試合はわたしの勝ちだけどまだやるかい　こっちははまだあと一人控えてるんだ」

と話した。その言葉を聞いた三人は背筋が凍る思いがした。結局勝負は幻海の大勝に終わった。そしてジークは協会に足を運びもう二度とインターミドルには参加しないことそしてチャンピオンの座も返上することを伝え事実上の引退となった。それから数日後ジークやヴィヴィオ達がいつものように鍛練に励んでいると道場にある三人組が訪れた。その三人とはヴィクター、ミカヤ、ハリーの三人であつた。その姿を見たジークは

「みんな どうしたん まさかまたうちを連れ戻しに来たん」

と話すジークに三人を代表してミカヤが話し出した

「今日は君じゃなくて君の師範と先生に用事があるんだ  
呼んできてくれないか？」

と話すとジークの代わりにヴィヴィオが二人を呼びにいった  
二人がくると三人はこう切り出した

「この間は失礼しました 今日ここに来た理由はこの道場に  
通わせていただきたく挨拶に来ました 私たちも強くなりた  
い何卒よろしくお願いいたします」

と頭を下げた。それを見た幻海と戸愚呂は

「全く なんてうちの道場にはこんな奴らしか集まらないだ」

とため息まじりに話し三人に向かってこう告げた。

「まあ とにかく頑張ってみな あとジークにも前話したが

この道場の鉄の掟を教えおく これが守れない奴は

速攻叩き出すからね覚えておきな

ひとつ目、弱音は吐かない

ふたつ目、仲間は絶対に大切にする」

それを聞いた三人は元気よく返事をしこの道場にまた  
新たな仲間が出来たのであった。

## それぞれの選択

ジークが今後一切インターミドルに出場せず道場で武道一本でやっていくと聞いた翌日のことヴィヴィオ達はそれぞれ考えていた自分達はどうするべきかと

「ねえどうする インターミドル本当のこと言うとなたしね  
一度でいいからあの舞台上でジークさんと一対一の試合が  
してみたかったんだ」

とヴィヴィオが語った。それを聞いた他のメンバーも  
ヴィヴィオと同じ意見だった。特にミカヤ達三人は打倒  
ジークを目標に頑張っていたので少しばかり闘志を削がれた  
気分になってしまっていた。鍛練を始めてもそのその気持ちが  
現れてしまっていたのか鍛練に身が入らず中途半端になって  
しまっていた。するとそれを見ていた幻海がヴィヴィオ達を  
呼び目の前に全員座らせた

「おい お前達最近たるんでるんじゃないか お前達の気持ちは  
わからないでもない しかしなあ選択はジークが悩みに  
悩んで出した答えだ その気持ちを理解してやるのも仲間と  
して大事だと思うけどね」

と話した。そう言われてヴィヴィオ達は初めて気がついた  
知らず知らずのうちにジークのことより自分達の気持ちの方  
を大事にしている自分がいることに

その事に気がついたヴィヴィオ達はこれからどうするか  
話し合っていた するとある人物が道場を訪れた その人物  
とは幻海の弟子でヴィヴィオ達の兄弟子にあたる

浦飯幽助であった。幽助は飛影や蔵馬が人間界に帰った後も  
一人ミッドに残りたまに道場に顔を出していた

幽助はヴィヴィオ達を見つけると

「よう ヴィヴィオみんな元気か あれ？見慣れない顔が  
いるな ヴィヴィオあいつらも新しい門下生か？」

と尋ねるとヴィヴィオは

「はい この前に入門されたんです」

と答えた。すると幽助は四人に向かって挨拶をした

「俺の名前は浦飯幽助っていうんだ これからよろしくな」

と話した。すると四人は幽助に挨拶を返しながらこう思った

「この人も師範や先生と並ぶほどの化け物だ こんな人間が  
まだミッドにいるなんて もしかしたらこの人と闘ってみたら  
何か掴めるものがあるかもしれない」

と思った四人を代表してミカヤが幽助にあるお願いをした

「浦飯さん もしよかったらわたし達と一対一の勝負を  
してくれませんか？ あなたの力を見てみたいです」

と言われた幽助は

「別に俺は構わねえよ 強い奴らと闘うのは好きだからな」

と快諾してくれた。すると幻海が幽助に向かってこう告げた

「おい 幽助こっちの用事が先だよ この子らの相手をする



のはそのあとにしてくれないかい」

と話し幻海と戸愚呂と幽助は揃って道場の奥に入っていった  
すると幽助は呼び出された理由を聞いた。

「どうしたんだよ 何かあったのか？」

と聞くと幻海が真剣な顔つきでこう話した

「幽助よく聞いてくれ あの子達には話してないんだが

わたし達がこっちに居られる期限が迫ってきてるんだよ」

とそれを聞いた幽助は

「おい ならこの道場はどうするんだよまさか閉めるのか？」

とその問いかけに

「だからな幽助 出来たらあんたにこの道場を継いで欲しい

と思ってるんだ あんたは靈気にも妖気にも精通してる

だからわたし達がいなくなってもあいつらを導いてくれる  
と思うんだ」

と話した。それを聞いた幽助はこう答えた

「こんな話すぐすぐには答えられねえよ 少し時間をくれ」

と話し今日のところはここで終わった。話しが終わり奥から  
出てきた幽助はミカヤ達四人に翌日また来るからその時に  
試合をしようと約束して道場を後にした。

そして翌日ヴィヴィ才達八人はある場所に來ていた

その場所とは前にヴィヴィオとアインハルトが真剣勝負をしたあの戸愚呂特製の石盤（リング）のある空き地である。そこには幽助がもう来ていてウォーミングアップをしていた。すると四人を代表してミカヤが幽助に

「今日はありがとうございます。貴重な時間を頂いて」

とお礼を述べた。すると幽助は

「別にいいよ。俺も楽しみだったしな」

と話した。そしてミカヤ達四人と幽助の試合が始まった。

一試合目は幽助とハリーの試合となった

ハリーがバリアジャケットを装着して試合が始まった

ハリーは得意の砲撃を当てようとするも幽助のスピードに

一発も当てられず逆に幽助の 霊丸 をまともに喰らい気絶してしまった

二試合目はヴィクターとの試合となった

ヴィクターは騎士甲冑のような鎧と槍のようなデバイスを

構え幽助に向かってきた。だがやはり幽助のスピードに付いていけず槍の攻撃も全て見切られた直後脇腹に強烈な蹴りを喰らいその場に倒れた

三試合目はミカヤとの試合となった

ミカヤは日本刀のようなデバイスを左右に構え幽助に切り

かかるような形をとった。すると幽助はその二本のデバイスを真剣白刃取りの要領で受け止めると飛び膝蹴りをミカヤの顎にお見舞いし膝蹴りを喰らったミカヤもその場に倒れた。

そして最後ジークとの試合となった

ジークはいきなり「スキル 鉄腕」を使い最初から全力

モードで幽助に向かっていった。しかし相手はあの幽助

いくらあの「鉄腕」を装着したジークでも一撃も入れられず

に反撃を喰らい負けてしまった

結局試合は幽助の全勝 これ見ていたヴィヴィオ達は

「やっぱり 幽助さんは強い あの四人相手に息ひとつ切らしてないなんて」

と感心していた そして試合が終わると幽助はミカヤ達四人に話し掛けた

「今日はありがとうな 久々に楽しかったぜ」

と話し感謝の意を伝えた。すると四人も幽助に感謝の意を伝えた。するとミカヤ達四人には新たな目標が出来た

「いつか 浦飯さんを倒す」

という共通の目標が そしてそれぞれインターミドルに向けての選択をし始めた

ヴィヴィオ、コロナ、リオの三人は今度のインターミドルには参加しないことに決めた もっと力を付けてそれからでも遅くはないという判断だった

アインハルト、ミカヤ、ヴィクター、ハリーの四人はジークの返上したチャンピオンの座を掴むべくインターミドルへの参加を決めた

そして激戦に激戦を重ねた結果アインハルトが新チャンピオンの座に輝いた

チャンピオンに輝いた弟子の姿を見た幻海と戸愚呂は自分のことのように喜んだ

そして幽助もある選択をした 幻海に相談されていたことへの答えを幽助なりに出していたのだ

「へえ チャンピオンか すごいじゃねえかアインハルト」

と幽助が祝福した　するとアインハルトは少し照れた顔で

「ありがとうございます」

と返事を返した

今日はアインハルトがチャンピオンになった祝勝会が行われていた　その場所とは幽助が新たにオープンさせたラーメン屋である　ミッドに自分のラーメン屋をオープンさせるそれが幽助の導き出した出した答えだった

## 娘からの挑戦状

ある日の朝ヴィヴィオとなのははいつものように朝食を食べていた。ヴィヴィオも初等部六年生になり実力も相当上げていた。朝食を食べ終わりなのはが食器を片付けようとテーブルを見ると一通の手紙が置かれていた  
その手紙の相手は自分で差出人はヴィヴィオだった  
中身にはこう書かれていた

「大好きなママへ　私も道場に通い始めて三年程が経ちました  
それに私も初等部最後の学年になりました  
もしママさえ良かったら私と一対一の真剣勝負をしてください」

というヴィヴィオからの挑戦状だった。この手紙を見たなのはヴィヴィオが小さい頃を思い出していた

「あんな小さかったのにまさかこんな挑戦をしてくるなんて  
私の知らない間にだいぶ成長したんだな」

と手紙を見ながら嬉しく思っていた　ヴィヴィオが道場から帰ってくるとヴィヴィオ宛の一通の手紙が置かれていた  
中身を読むとそれはなのはからの返事であった。

「ヴィヴィオへ　ママへの挑戦ありがとうね　まさかあなたから挑戦を受けるなんて夢にも思っていなかったです  
あなたの気持ちとても嬉しく思います  
あなたからの挑戦喜んで受けます　親子だからといって手加減はしないよ　全力全開の真剣勝負をしましょう」

と書かれていた。その手紙を見たヴィヴィオはとても喜んだ　翌日ヴィヴィオは幻海になのはとの試合のこと

を伝えたすると

「へえ いよいよなのはに挑戦するのかい 最近お前も  
だいぶ力をつけてきたからね きつとなのは相手にも  
いい試合ができるはずだよ」

とエールを送った エールをもらったヴィヴィオは

「ありがとうございます 全力で頑張ります」

と話した そしてヴィヴィオはなのはとの試合の前に  
ある人との試合を組んでもらうように幻海に頼んだ

「なんだ ヴィヴィオ俺に用事って」

そう 呼ばれたのは幽助であった

「すみません 幽助さんあの私今度なのはママと真剣勝負を  
することになって良ければその前に幽助さんと手合わせを  
お願いしたいと思ひまして」

と話した それに対し幽助は

「別に俺は構わねえよ いよいよお前もあの母ちゃんに挑戦  
すんのか やるからには勝てよ」

とげきを飛ばされた そして幽助とヴィヴィオの手合わせ  
が始まった ヴィヴィオは本番同様に自分の今持っている  
最大の力で幽助に挑んだすると今まで一発も入れられなかった  
拳が何発か入るようになっていた それを見ていた幻海は

「まさか あの幽助に拳を当てられるようになるなんて私の知らないうちにあいつもだいぶ成長したみたいだねこりやなのはとの試合が楽しみだ」

と心の中で弟子の成長を嬉しく思っていた。

そしていよいよなのはとの試合の日を迎えた

試合の場所はいつものリング 観客は道場の門下生に先輩たちなのはの幼なじみそして聖王教会からカリムとシャツハ、セインそしてヴィヴィオの大親友であるイクスが駆けつけた  
幻海が審判を務める中試合の火蓋が切って落とされた  
最初はお互いに距離を取り相手の出方を探っていた

するとなのはが様子見のアクセルシューターを放ってきた  
なのはも見ていた観客もヴィヴィオは避けると思っていた  
しかしヴィヴィオはある技なのはのアクセルシューターを全て打ち落としたそれは幽助の得意技 「ショットガン」  
である 初めて見るヴィヴィオの技なのはも他の観客も驚いていた すると試合を見に来ていた幽助が

「へえ ヴィヴィオの奴ちゃんと自分のものにできてる  
じゃねーか」

と感心していた それを聞いていたスバル達が幽助に聞いた

「どういうことですか幽助さん まさかあの技幽助さんが  
教えたんですか？」

とそう聞かれた幽助は

「ああ ヴィヴィオになのはのアクセルシューターに対抗  
できる技はないか？ って頼まれたんでな教えたんだ」

と答えた アクセルシューターを打ち落としたヴィヴィオは  
すかさずなのはの懐に飛びこみ強烈な一撃をお見舞いしよう  
とした だがなのはもそれを読んでいたのかシールドで拳を  
防ぐとバインドでヴィヴィオを固定したのはの得意技

「デイバインバスター」

を放った しかしヴィヴィオはなのはのバインドを当たる  
寸前で破りかろうじて直撃は免れた すると今度は  
ヴィヴィオがなのはに向かって「霊魔丸」を放った  
なのはは「霊魔丸」をシールドで防ごうとしたがシールド  
に当たった瞬間ヒビが入り始めた

「これは不味い」

と思ったなのははあわててその場から離れた  
すると今度はヴィヴィオが追撃するように

「セイクリットブレイザー」

をなのはに向けて放った。さすがなのはもこれは  
避けられず直撃まではいかなくてもある程度のダメージ  
を受けてしまった するとなのはも本気をだし始めたのか

「ブラスタービット」

と呟くとなのはの周りに四個程の小さな砲台が浮いていた

「ブラスタービット」とはなのはの砲撃をさらに強力にする

なのはにとつての切り札である

それを見たなのはの幼なじみやスバル達はこう思った



「なのはは 本気でヴィヴィオを仕留めるつもりだ」

と そしてヴィヴィオもそのなのはの姿勢に感謝する  
であった ヴィヴィオは自分のスピードを生かして懐  
に入り込もうとするが「ブラスタービット」が邪魔をして  
近づけずにいた するとなのはが「閃光弾」を放った  
ヴィヴィオはその「閃光弾」に視界を一瞬封じられ  
視界が戻ると「ブラスタービット」から伸びたバインドに  
よって手足の動きを完全に封じらってしまった それを確認した  
なのはは一旦距離を取りあの大技を撃つ準備を始めた  
なのはの最大最強の収束砲

「スターライト ブレイカー」

である なのはは空に上がると魔素の収束を始め集められた  
魔素がピンクの魔素の塊となってなのはの前に浮かんでいた

「スターライトブレイカー」

となのはが叫ぶとピンクの魔素の塊が魔方陣を抜けて巨大な  
収束砲となりヴィヴィオに襲いかかった さすがのヴィヴィオ  
も「ブラスタービット」からのバインドは破れずなのはの  
「スターライトブレイカー」をまともに受けてしまった  
そのダメージは凄まじくバリアジャケットはボロボロになり  
立っているのが精一杯の状態になってしまった そしてなのは  
はとどめの一発といわんばかりの「デイバインバスター」を  
放った それを喰らったヴィヴィオはその場に倒れてしまった  
倒れたヴィヴィオは自分の意識が遠くなるのを感じた

「ああ 私負けたんだ やっぱりまだママに勝つなんてムリ

だったのかな」

思っていると どこからかヴィヴィオに話しかける声がした  
「起きなさいヴィヴィオ あなたはまだ全力を出しきって  
はいませんよ」

と優しく語りかけるような女性の声がした

その声にヴィヴィオは聞き馴染みがあった

「まさか あなたオリヴィエですか？」

と聞くと優しく頷いた するとオリヴィエはこう話した

「あなたにはまだ眠っている力があります 今こそその  
力に目覚める時です さあいきますよ」

と言われたヴィヴィオは意識が戻り自分の身体が黄金色  
に輝いているのに気がついた  
それを見た幻海は

「まさか あれは聖光気かい とんでもない娘だね 全く」

と言って驚いていた。試合を見ていた観客達はヴィヴィオの  
変化が分からず幽助に聞いてみた

「幽助さん 今のヴィヴィオの状態ってそんなに珍しい  
んですか？ ぱつと見あまり変わらないですけど」

という質問に対し幽助はこう答えた

「あれはな 聖光気って言って あのばあさんでさえ手に入れられなかった究極の闘気だ」

と答えた それを聞いた観客は驚愕の顔になった

「まさか あの師範でさえ手に入れられなかった究極の闘気をヴィヴィオが」

と話したそしてなのはもヴィヴィオの変わりように驚いていた

「さっきの一撃で終わったと思った けど起き上がって来たヴィヴィオは今までと雰囲気全然違う 下手をすると一発でやられる位の強さを持つてる」

と思った するとヴィヴィオは目にも止まらぬスピードでなのはの懐に飛びこむと軽く掌を当てただけでなのはを吹き飛ばした それを見ていた幻海は

「これは決まったね 今の状態のヴィヴィオに勝てるのは恐らく幽助ぐらいだろう」

と思い試合を止めた するとなのはが

「師範 なぜ試合を止めるんです 私はまだやれます」

と話した それに対し幻海はこう告げた

「やめときな これ以上やっても意味がない お前も

わかったら 今のヴィヴィオの実力はお前より遥かに上だ」

と聞かされた　　なのははその事実を認めヴィヴィオに  
こう伝えた

「ヴィヴィオ　本当に強くなったね　ママ凄く嬉しいよ」

とその言葉を聞いたヴィヴィオは涙を流しながら

「私こそ　ありがとうママ　大好き」

とお礼を述べるのであった

そしてなのはとヴィヴィオの親子による真剣勝負はヴィヴィオ  
の勝利で幕を閉じるのであった。

師との別れ〜そして〜

いつものように学校が終わったヴィヴィオ達四人とそれぞれの用事を終わらせ道場に向かっていたミカヤ達四人は途中で落ち合い全員で道場に向かっていった。道場に着くとそこには幽助と落ち込んだ顔のジークの二人が入り口に立っていた。いつもと違う様子のジークに疑問を持ったメンバーを代表してヴィヴィオが質問した

「どうしたんですか？ ジークさんそんな顔してもしかして何かあったんですか？」

とそう聞かれたジークは涙を堪えながらこう答えた。

「し、し、師範と先生がいなくなった　うちが起きたらこの置き手紙があつて」

とくしゃやくしゃになった紙を握りしめていた。

それを聞いたヴィヴィオたちは最初ジークの言葉が理解できず最初は何かの冗談だと思ひもう一度聞きなおした。

「ジークさん　もう一度聞かせてください　師範と先生がいなくなつたつて本当なんですか？」

「うん　うちが起きたら師範と先生がいなくてこの手紙だけが置いてあつたんよ」

とそう話すジークの顔は

「夢なら早く覚めて欲しい」

と願う思いで一杯であった　するとヴィヴィオは隣にいた  
幽助に

「幽助さんは何か知らないんですか？　二人がいなくなつた  
理由を」

と聞くと幽助は

「俺も全部はわからねえ　もしかするとその手紙に何か  
書いてあるかもしれない　とりあえず読んでみたらどうだ？」

と話しヴィヴィオ達はその手紙をみんなで読むことにした。  
するとその手紙にはこう書かれていた。

「お前たちへ

あんた達がこの手紙を読んでいる頃には私達は多分この世界  
にはいないだろうね　こんな形での別れになったことは謝罪  
する　でもね私も戸愚呂もしんみりした別れは苦手なんでね  
最初お前たちに会った時は

「こいつら強くなるのかね？　恐らく途中で逃げ出すさ」

ってというのが私達の印象だった　だけどあんたらはそんな  
私たちの予想を見事に覆してくれた  
そして私たちの予想以上の強さを身に付けてくれた  
そんなあんた達を見た時に思ったんだ

「もう私たちに教えることはない　この子達はもう十分一人  
でやっていける」

とだから私たち達は胸を張って元の世界に帰れるよ

PS

最後に言っておく　あんた達は最高の弟子だ　私たちが  
いなくなっても武道に励む気持ちは忘れてはいけないよ  
幻海そして戸愚呂より

その手紙を読み終わると手紙の字が滲んでいいる事に他のメンバー  
が気がついた　その理由は手紙を代表して読んでいた  
ヴィヴィオが流した涙によって滲んでいたのだ  
手紙の中身を聞いたメンバーは全員泣きながら幽助に尋ねた

「幽助さん　師範と先生はいつ戻ってくるんですか？」

という質問にこう答えた

「二人は多分もう帰ってこねえ　お前たちには黙ってたが  
俺は二人からこの道場を継ぐように頼まれたんだ  
こつちにラーメン屋を開いたのもそれが主な理由だ」

と話した。それを聞いたメンバーはある意見で一致した

「二人を探そう　きっとまだこのミッドにいるはずだよ  
説得して戻って来てもらおう」

と話した。それを見ていた幽助は

「全く　こいつらはおい二人とも見てるか？　こいつら  
にはまだまだあんたらが必要みたいだぜ」

と心の中で考えていた。それからヴィヴィオ達は道場の  
休みの日にはミッドの色んな所に向かい二人を探した  
しかし現実残酷でいくら探しても二人は見つからなかった  
そして探し始めて半年位がたった頃メンバー全員が二人の事  
は諦め幻海の言葉通り武道に集中するようになっていた

それから三年程がたちヴィヴィオ達は18才アインハルトは二十歳になり各々将来の事を考え始めていた

先に成人を迎えていたミカヤ達はそれぞれの道を選んだミカヤは自分の道場を開き ヴイクターは親の経営している会社を継ぐ形で若くして取締役となった

ハリーはもともと子ども好きというのもあったので猛勉強をして小学校の先生になっていた

そしてジークは幽助とともにこの道場を継ぐ形で自らの武道を磨きながら子ども達を指導していた

そしてヴィヴィオ達三人は高等部を卒業すると時空管理局に就職した。アインハルトもヴィヴィオ達が就職すると同時に自らが保持していたインターミドルのチャンピオンの座を返上しインターミドルからも引退し管理局に就職した。

四人が管理局に就職した理由は管理局の中でとある部署が正式に立ち上がるという情報をヴィヴィオの母である

高町なのはに聞きその部署なら今まで自分たちが培ってきたものが生かせると判断したからである

二人がミッドからいなくなっても暫くは妖怪たちも静かにしていた だが時間が経つと妖怪の間の中であるウワサが立つようになっていた

「どうやら幻海と戸愚呂のコンビはもうこのミッドにはいないらしい」

とそのウワサが広がり静かにしていた妖怪たちがまた悪さをし始めたのだ

最初は数も少なく管理局で妖怪担当をしていたティアアナやたまに幽助に助っ人に来てもらい対応していたのだが

ウワサがどんどん広まると流石の二人でも対応できなくなっていた そこで管理局も本格的に妖怪退治の部署を立ち上げる



事を決定したのだ。そして集まったのがティアナを隊長に  
ヴィヴィオ達四人それからイクスも後方支援の為にと入隊  
した。その名も妖怪対策一課。通称あやかし一課が発足した  
実働隊はヴィヴィオ、アインハルト、リオ、そしてコロナ  
イクスは自らの能力であるマリアージュを生かして敵を  
目的地に追い込む支援の方に回っていた  
あやかし一課が発足すると今まで我が物顔で悪さをしていた  
妖怪も徐々に排除され少しずつ平和な日々が戻り始めていた  
ある日いつものようにパトロールをしているとティアナから  
緊急連絡が入った

「あなた達聞こえる。こちらティアナ。どうやらまた妖怪が  
悪さをしているみたいなの。しかも2カ所同時でそれで  
悪いんだけど二手に別れて対応してくれないかしら」

とそれを聞いた四人は二手に別れて対応することにした  
ヴィヴィオとコロナ、リオとアインハルトが二人ずつに別れ  
現場に向かった。そして現場に着いたヴィヴィオから報告を  
受けるとティアナはとんでもない報告を受けることになった

「ティアナさん。こちらヴィヴィオ現場に到着しましたが  
こんな妖怪見たことありません」

と報告があがってきた。するともうひとつの現場に向かった  
アインハルトからも同様の報告を受けた  
そして送られてきた画像を見てティアナは驚愕した

「まさか。あれはB級妖怪なんであんな強い妖怪がこのミッド  
にあんなの相手にしたらこっちもただじゃすまない」

と考えたティアナは一旦退避命令を出した。するとヴィヴィオ

がこう伝えてきた

「ティアナさん　その命令には従えません　近くに小学校があつてその妖怪が子ども達を狙っているんです　コロナにはその小学校に向かつてもらいました　だからこの場所は必ず守ります」

と話した　それを聞いたティアナは拳を握りしめて  
こう伝えた

「わかった　でも必ず生きて帰って来なさいよ」

とそれを聞いたヴィヴィオは

「はい」

と元気よく答え敵に向かつていった　ヴィヴィオは  
全身に力を込めると久しぶりに「聖光気」を使った

「あいつに勝つにはこれしかない　だけどこの気は長続き  
しないから勝負は早めに決めないと」

と考えながらヴィヴィオは今自分が使える最強の技を撃つ  
為拳に力を込めたそして「聖光気」でアップしたスピード  
を生かし一瞬で敵の懐に入ると

「霊光魔弾」

と叫びながら敵の鳩尾あたりに拳をめり込ませた  
するとヴィヴィオの技をもろに喰らった敵はその場に  
倒れこみ起き上がることはなかった

敵の撃破を確認するとヴィヴィオは現場をコロナに任せ  
アインハルトとリオの現場に向かった  
するとそこには血だらけで倒れているリオとアインハルトが  
いた　二人に駆け寄るとヴィヴィオに気がついた二人が  
ヴィヴィオに逃げるように支持した

「ヴィヴィオ（さん）今すぐ逃げてあいつは私たちの手に  
おえるレベルじゃない」

と話すと二人は気を失った　するとヴィヴィオは

「うあー」

と叫び再び「聖光気」を纏い敵に向かっていった

しかし二人の言ったと通りさつきは倒せたはずの敵が今度  
は手も足も出なかった　するとその妖怪が

「お前か　さつき仲間を倒した奴は　だが残念だったな  
俺はあいつと同じB級だが俺は上位の方の妖怪なんだよ」

とそれを聞いたヴィヴィオはその場に膝まずいてしまった

「なんだ　もうおしまいか？　さつきまでの勢いはどうした？」

と聞く妖怪にヴィヴィオはこう答えた

「もう私には　お前を攻撃する力は残ってない　煮るなる  
焼くなり好きにしろ」

と答えた　それを聞いた妖怪は

「いざぎいいいじゃねーか　じゃ苦しまねえように一撃で殺してやるよ」

と妖怪は持っていた刀をヴィヴィオに向かって振り下ろした  
ヴィヴィオは死を覚悟した　だがいつまでたっても刀は  
振り下ろされず変わりに懐かしい声が聞こえてきた

「おい　お前よくも俺の弟子達にひどいケガを負わせてくれたな　弟子達の代わりに俺が相手をしてやる」

と話すとその妖怪に向かって拳をぶつけた　するとその妖怪は木っ端微塵に砕けちり跡形もなく消え去った  
その背中を見たヴィヴィオはいてもたってもいられず  
その男の背中に飛びついたすると

「強くなったな　ヴィヴィオ」

とサングラスをかけた大男が褒めてくれた  
するとヴィヴィオは我慢していたものがあふれ出したのか  
戸愚呂の前に周り胸の中でわんわん泣いた　するともう一人の声が出た

「まったく　ちったあ大きくなって強くなったかと思えばこりやまたーから鍛えなおさないとダメかね」

と話す一人の女性が立っていた　それを見たヴィヴィオは  
幻海の胸にも飛び込み泣いた　するとアインハルトとリオが目覚め二人を確認するとヴィヴィオ同様に泣き崩れた  
それからコロナも合流しみんな懐かしの道場に帰ってきた  
二人の姿を確認したジークは夢ではないかと自分の頬を

つねったが夢ではなく本当に二人が戻って来てくれたことに大変喜んだ　するとヴィヴィオが二人に質問をした

「今度は　いつ元の世界に戻ってしまうのか」

とその質問に二人はこう答えた

「もう元の世界には帰らなくていいんだ　ずっとこのミッドに  
いられる

実はその手続きやらで暫くミッドを離れていたんだ」

とそれを聞いたヴィヴィオたちは幻海達がこれからずっと  
いられるとわかったことに心の底から喜んだ